

茨城県教育財団文化財調査報告第61集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書20

桜山古墳

平成2年6月

住宅・都市整備公団つくば開発局
財團法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第61集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書20

さくら やま こ よん
桜 山 古 墳

平成2年6月

住宅・都市整備公団つくば開発局
財團法人 茨城県教育財団



写真 桜山古墳全景
埋葬施設内遺物出土状況
(大刀・劍・鐵鎌・管玉)

序

首都圏への産業や人口の集中を緩和するため、県内においても大規模なニュータウン建設が、住宅・都市整備公団によって進められてきました。龍ヶ崎市においても、北部の台地を中心に建設が進められてきましたが、この開発地内には、多くの文化財が所在しておりました。

財團法人茨城県教育財團は、住宅・都市整備公団(昭和51年～昭和56年、宅地開発公団)の委託を受け、昭和52年度から竜ヶ崎ニュータウン建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施して参りましたが、平成元年度実施した桜山古墳の発掘調査をもって、全ての調査を終了することとなりました。これらの調査によって、数多くの貴重な遺構・遺物が検出され、龍ヶ崎市はもとより茨城県の原始・古代・中世史を解明する上に、貴重な資料を提供することができたものと考えております。

本書は、平成元年度に発掘調査を実施した桜山古墳の成果を収録したものであります、歴史の研究資料として、また、教育・文化の向上の一助として広く活用されることを希望してやみません。

なお、発掘調査及び整理に当たり、委託者である住宅・都市整備公団からいただいた御協力に対し、厚く感謝申し上げます。また、茨城県教育委員会・龍ヶ崎市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位よりいただいた御指導・御協力に対し、心から感謝の意を表します。

平成2年6月

財團法人 茨城県教育財團

理事長 磯 田 勇

例　　言

1 本書は、平成元年度に住宅・都市整備公団の委託により、財團法人茨城県教育財団が発掘調査を実施した、茨城県龍ヶ崎市長峰町字才ノ谷63番地外に所在する桜山古墳の発掘調査報告書である。

2 桜山古墳の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

平成2年度初めの組織替えにより、従来の調査課(企画管理班、調査第一・二・三班、整理班)は埋蔵文化財部となり、その下に企画管理課、調査課、整理課をおき、調査課には、調査第一・二・三の三つの班をおくこととなった。

理　事　長	磯　田　勇	昭和63年6月～
副理事長	小林　元	昭和63年4月～
常務理事	小林　洋	平成元年4月～
事務局長	木　邦　彦	平成元年4月～
埋蔵文化財部長	石井　毅	平成2年4月～
企課長代理	北沢　勝　行	平成2年4月～
企課主任調査員	水　側　敏　大	平成2年4月～(昭和62年4月～平成2年3月企画管理班長)
企課主任調査員	小　河　邦　男	(平成元年4月～平成2年3月企画管理班)
企課主任調査員	小　山　映　一	平成2年4月～
企課主任調査員	圓　部　昌　俊	昭和63年4月～
企課主任調査員	大　部　章	(昭和61年4月～平成2年3月企画管理班)
企課主任調査員	吉　井　正　明	平成元年4月～
企課主任調査員	大　貫　吉　成	平成2年4月～
企課(部長兼務)	右　井　毅	平成元年4月～
企課主任調査員	中　村　幸　雄	平成元年度
企課主任調査員	人　見　晚　朗	平成元年度調査
企課主任調査員	小　泉　光　正	平成元年度調査
企課長	沼　田　文　大	平成2年4月～
企課主任調査員	小　泉　光　正	平成2年整理・執筆・編集

3 本書に使用した記号については、第3章第1節の遺構・遺物の記載方法の項を参照されたい。

4 発掘調査及び整理に際し、金属製品について、国立歴史民俗博物館助教授永島正春氏に指導を得た。また、赤彩物質の分析については、通産省工業技術院科学技術研究所通商産業技官日置昭治氏に依頼した。

その他、ご指導・ご協力を賜った関係機関、並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表する次第である。

目 次

序

例 言

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査方法	2
第3節 調査経過	3
第2章 位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3章 桜山古墳	10
第1節 古墳の概要と記載方法	10
第2節 墳丘	12
第3節 埋葬施設	25
第4節 埋葬施設内出土遺物	26
第5節 その他の出土遺物	38
第4章 考察	47
第1節 墳丘及び埋葬施設	47
第2節 遺物	49
第3節 まとめ	51
結 語	53

挿 図 目 次

第1図 調査区呼称図	2	第12図 脊工実測図 (A・B地点)	33
第2図 桜山古墳周辺遺跡分布図	8	第13図 管玉実測図 (C・D地点)	34
第3図 桜山古墳墳丘測量図	13~14	第14図 大刀・剣実測図	35
第4図 第1号トレンチ土層断面図	15~16	第15図 短劍・鉈・刀子実測図	36
第5図 第2号トレンチ土層断面図	17~18	第16図 鉄鎌実測図	37
第6図 第3・4号トレンチ土層断面図	19	第17図 五輪塔・撲鉢出土状況図	41
第7図 第5号トレンチ・前方部東端 上層断面図	20	第18図 撲鉢実測図・出土土器拓影図	42
第8図 墳丘断面図	21	第19図 五輪塔実測図(1)	43
第9図 墳形想定図	22	第20図 五輪塔実測図(2)	44
第10図 埋葬施設実測図	23~24	第21図 石尖頭図(1)	45
第11図 墓葬施設内遺物出土状況図	32	第22図 石尖頭図(2)	46
		第23図 古鏡拓影図	46

表 目 次

表1 桜山古墳周辺遺跡一覧表	9	表10 刀子観察表	31
表2 管玉観察表 (A地点)	27	表11 鉈観察表	31
表3 管玉観察表 (B地点)	27	表12 五輪塔観察表	39
表4 管玉観察表 (C地点)	28	表13 石觀察表	39
表5 管玉観察表 (D地点)	29	表14 古鏡観察表	40
表6 大刀観察表	29	表15 茨城県内の出現期古墳概況	48
表7 剣観察表	30	表16 桜山古墳山上管玉統計表	49
表8 短劍観察表	30	表17 県内前期古墳出土管玉平均値表	50
表9 鉄鎌観察表	31		

写 真 目 次

P L 1 桜山古墳周辺鳥瞰、調査前全景、 墳頂部斜面	P L 8 遺物山上状況(粘土帶内)
P L 2 埋葬施設掘り方プラン・土層断面	P L 9 鉄製品
P L 3 埋葬施設	P L 10 遺物X線写真
P L 4 埋葬施設土層断面A・B・C	P L 11 A・B地点出土管玉
P L 5 第1・2・3号トレンチ土層断面	P L 12 C・D地点出土管玉
P L 6 第4・5号トレンチ土層断面	P L 13 撲鉢・土器
P L 7 東・西小口上層断面、前方部東端土層断面、粘土帶北壁断面、炭化材出土状況、第1号トレンチ西端部、第4号トレンチ北端部	P L 14 五輪塔

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

竜ヶ崎ニュータウンの建設計画は、龍ヶ崎市の北部台地上の総面積671.5haに及ぶものであり、⁽¹⁾首都圏への人口や産業の集中緩和を図ることを目的としたものである。この計画は、膨大な住宅用地の需要に対応し、良好な住宅環境を備えた住宅用地の供給と、地域内に就業の場を設けることにより、居住者の地元定着を意図している。

この住宅・都市整備公団の開発は、当初、日本住宅公団が計画し、昭和46年1月「竜ヶ崎牛久都市計画事業」として計画の大綱がまとめられ、その事業名を「北竜台及び龍ヶ岡特定土地区画整理事業」と称した。

その後、昭和51年4月に宅地開発公団茨城開発局が設立され事業を引き継いだが、昭和56年10月に、宅地開発公団と日本住宅公団が統合し、新たに住宅・都市整備公団が設立され、従来の契約によって生じた権利・義務は、そのまま新公団に継承され今日に至っている。

茨城県教育委員会は、昭和45年に龍ヶ崎市教育委員会と開発区域内の埋蔵文化財の分布調査を実施し、その結果に基づき22遺跡について文化財保護の立場から必要な措置を講ずるため協議を重ねた。さらに、その後の分布調査や、造成工事により遺跡の追加発見があり、現在では37遺跡⁽²⁾となっている。県教育委員会は、これらの遺跡について関係機関と再三協議を行い、37遺跡の内32遺跡については現状保存が困難であるため記録保存の措置を講ずることになった。

茨城県教育財団は、昭和52年度に当時の宅地開発公団茨城開発局と「北竜台及び龍ヶ岡特定土地区画整理事業」の実施に係る埋蔵文化財発掘調査の業務委託契約を締結して以来、竜ヶ崎ニュータウン内の埋蔵文化財の発掘調査を実施してきた。桜山古墳は、平成2年1月から3月にかけて、発掘調査を実施したが、竜ヶ崎ニュータウン建設計画区域内の埋蔵文化財の発掘調査としては最後のものとなった。

注

(1) 開発面積は、北竜台の小柴新田町・柏田町の全域と、若柴町、福荷新田町、駒馬町、南中島町、別所町の各一部で326.6ha、龍ヶ岡の貝原塚町、羽原町、八代町、長峰町の各一部で344.9haの計671.5haである。

(2) 竜ヶ崎ニュータウン建設計画区域内に所在する遺跡の名称所在地については、第2図を参照されたい。なお、これらの遺跡は、Rの頭文字を付し略号としている。現在は、R34まで付されているが、R6がAとBに分かれ、R28がR28、R28A、R28Bに分かれているため遺跡数は37となっている。また、これまでに地域内の発掘調査・整理を伴って19回の報告書が刊行されている。

第2節 調査方法

1 調査区設定

桜山古墳の発掘調査を実施するにあたり、遺跡及び遺構の位置を明確にするため調査区を設定した。

地区設定は、日本平面直角座標第IX系、X軸（南北）-9,240m・Y（東西）+35,680mの交点を通る軸線を基準に、東西・南北各々40mずつ平行移動して大調査区（大グリッド）を設定した。さらに、大調査区を東西・南北方向に各々10等分して、4m四方の小調査区（小グリッド）を設定した。大調査区は、北から南へ「A」・「B」・「C」、西から東へ「1」・

「2」・「3」と大文字を付して、「A1区」・

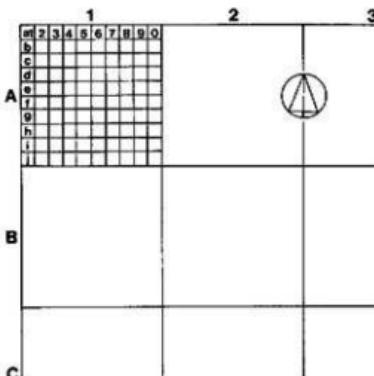
「B2区」のように呼称した。さらに大調査区を4m四方の小調査区に100等分し、各々同様に北から南へ「a」・「b」・「c」・、西から東へ「1」・「2」・「3」・と小文字を付した。各小調査区の名称は、大調査区の名称と合わせた四文字「A2ba区」・「B2ca区」のように呼称した。（第1図）

なお、桜山古墳は、調査対象面積が3,260m²で、大調査区で南北「A」～「C」、東西「1」～「3」の範囲に位置している。

2 遺構確認

桜山古墳は、前方後円墳で独立丘の尾根に構築されているが、その南側は人家の建築により削られ崖となっていた。遺構確認調査は、まず、東西の稜線に沿って第1号トレンチを設定した。次に、北の斜面に第2～5号（西から東へ）の4本のトレンチ（幅4m）を設定し、計5本（第3図）のトレンチにより、本古墳の規模や、盛上の調査、埋葬施設の検出を試みた。その結果、墳頂部に埋葬施設を、東斜面中腹から五輪塔と人骨と思われる骨片を埋納した浅鉢を検出した。

第1号トレンチ西端部と、第2号トレンチ北西端部、及び、中央にあるくびれ部、第3号トレンチ北端部、第4号トレンチ北端部で、周溝の確認調査を行った。第4号トレンチ北端部では、腐蝕上層が検出されたが、人為的掘り方は確認できなかった。他の各トレンチにおいても、排水管の埋設による搅乱や、地山面が検出され、周溝は確認できなかった。



第1図 調査区呼称図

また、本古墳の規模を把握するために、封土の調査を進めた。第1号トレンチ東部北側、第2～4号トレンチ東側を拡張調査し、第5号トレンチ南側についても第1号トレンチに直交するトレンチを入れ、土層断面の調査を行った。その結果、後円部、前方部先端で盛土の範囲と、旧表面上面を確認することができた。

3 遺構調査

当遺跡における遺構の調査は、次の方法で行った。

墳丘の調査については、設定した5本のトレンチの土層断面を観察し調査した。第1号トレンチでは北面を、他のトレンチについては西面を土層観察面とし、表土、盛土、旧表土の堆積の様子を調査し、基本的には20分の1の図面に記録した。

埋葬施設の調査は、当初、主軸方向(東西)とそれに直交する方向に2本の上層観察用ベルトを設け、六分割で行った。また、東西トレンチ土層断面は南面を、南北トレンチの土層断面は西面を、それぞれ実測記録した。粘土層の調査は、南北方向に幅40cmのトレンチを4本入れ、東西の小口部では、小口部に直交する方向でトレンチを設定して掘り込み、南面を実測記録した。

土層観察は、色相・含有物・混入物の種類や量、及び粘性・締まり具合等を観察して、土層分類の基準とした。

遺構や遺物の平面実測は、水糸方眼地張り測量で行った。上層断面や遺構断面の実測は、遺跡内の標高を基準に、水平にセットした水糸を基準として実測した。遺物は、出土位置・標高・遺物番号等を遺物出土状況図に記録しながら取りあげた。

調査の記録は、上層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物山上状況写真撮影→遺物出土状況図作成→遺構平面(完掘)写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成の順で行った。

第3節 調査経過

桜山古墳の調査は、平成2年1月1日から平成2年3月31日にかけて実施した。調査区域の、崖下に人家があり危険を伴うことや、調査期間が3ヶ月であるため、伐開や地形測量等を業者に委託して実施した。特に、危険防止には十分に配慮して調査を進めた。以下、発掘調査の経過について記述する。

平成元年

12月中旬 3本の御神木を中心に、うっそうと繁った雑木の伐開を始めた。22日までには、重機を導入して3本の御神木も切り終えた。

平成2年

1月上旬 発掘調査を開始するための諸準備を行う。清掃・整地等の作業をしながら、9日には

発掘調査の円滑な推進と作業の安全を祈って、関係者列席のもと「鍔入れ式」を挙行した。

- 1月中旬 表土除去の前段階として、トレンチ境界の根切り作業を進めた。併行して、南及び北側の斜面に安全対策の土止め防御柵を、業者に委託して設置した。
- 1月下旬 26日、第2号トレンチから遺構確認調査を進め、30日には、第1号トレンチ土層断面の写真撮影、実測を開始した。
- 2月上旬 降雨、降雪に悩まされながら、遺構確認、土層断面実測を進めた。
- 2月中旬 悪天候が続き、作業にも支障が出たが、13日に第2号トレンチの土層断面実測を終了した。盛土の様子、埋葬施設の掘り方が確認できた。14日、埋葬施設測量のための方眼杭打ちを行った。
- 2月下旬 第3・4・5号トレンチ土層断面実測が終了し、第1号トレンチ西裾部、第4号トレンチ裾部において、周溝の確認調査を行ったが、周溝の形跡は確認されなかった。後円部東斜面出土の浅鉢、五輪塔の取り上げを行い、盛土調査を進めた。
- 3月上旬 第1号トレンチ土層断面実測が終了した。3日からは、埋葬施設の掘り込みを開始し、覆土の土層断面写真撮影、実測を行った。墳丘の規模を確認する為に、エリア東端の盛土調査を行った。
- 3月中旬 埋葬施設調査と、第2・3号トレンチ裾部において周溝の確認調査を行った。その結果、周溝は確認できなかった。16日、埋葬施設調査の中で粘土塊内から管玉が出土した。17日、直刀、劍、鐵鏃、管玉が出土した。19日に、航空写真撮影を実施した。
- 3月下旬 20日、剣出土地点の南側の粘土塊内側の壁際から、刀子、鎌が出土した。遺物の平面実測後、埋葬施設掘り方調査の為、南北2本と東西の小口部にトレンチを入れた。その結果、自然の粘土層と人為的に貼った粘土床の範囲を確認できた。24日には、報道機関を対象に説明会を催した。撤収作業と併行しながら、埋葬施設の精査を進め、28日には埋め戻し等の安全対策を行い、一切の調査を終了した。



第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

桜山古墳は、茨城県龍ヶ崎市長峰町字才ノ谷63番地ほか8筆に所在する。

龍ヶ崎市は茨城県の南部に位置し、東は稲敷郡江戸崎町・同郡新利根村、南は同郡河内村・北相馬郡利根町、西は取手市・北相馬郡藤代町・筑波郡伊奈町、そして北は稲敷郡墓崎町・牛久市の2市3郡と接している。市域は東西約12km、南北約9kmで、面積は約75km²である。市の人口は56,118人(平成2年5月1日現在)で、既に、建設が進められている「龍ヶ崎ニュータウン」の、北竜台地区だけで、6,682人(平成2年4月1日現在)が居住しており、首都圏のベッドタウンとして社会層が著しい。

龍ヶ崎市は県南地域の政治・経済・文化の中核的都市として発展し、市街地は、JR常磐線佐貫駅から南東に走る関東鉄道の龍ヶ崎駅を西端とし、東西約2kmにわたって形成されている。現在も、市内には古い屋敷が残っている。近乍は、交通網の発達に伴い千葉県や東京都との結び付きを強めている。

市域の地形は、北部の台地と南部の低地に大別され、北西部には牛久沼が位置している。北部台地は、筑波台地から連なる稲敷台地の南縁にあたり、台地面は標高23~27mの平坦地であるが、縁辺部は侵食谷によって刻まれ複雑な地形を形成し、比高10~18mの急斜面で低地と接している。

稲敷台地は、海成の成出層上に形成され、上位に龍ヶ崎砂礫層、常総粘土層が重なり、更に東京浮石を含む関東ローム層が2~3mの厚さで堆積している。この台地は、平地林や畑として利用されてきたが、近年、T・葉園地・住宅建設といった都市開発のめざましい地域となっている。

南部の低地は、古鬼怒川と小貝川によって形成された広大な沖積低地で、標高3~6mである。市街地南方、約4kmには利根川が東流し、川を挟んで千葉県木下台地がある。沖積地のほとんどは、水田に利用され、古くから常総の穀倉地帯として知られてきた。

桜山古墳は、龍ヶ崎市街地から北東に約4kmの稲敷台地南縁、独立丘の尾根に所在し、墳頂部の標高は23.3mである。本古墳の北側は、長峰遺跡で、その北には長峰町と半田町の間に開口している浸食谷が、台地間を北西の貝原塚町方面へ延びて崖を形成している。南側にも谷津が入り込み長峰町と八代町の間に開口し、浸食谷が樹枝状に台地に入り込み比較的ゆるやかな斜面を形成して貝原塚方面へ延びている。本古墳は、その舌状に張り出した長峰町の台地の先端に構築されている。眼下には、広大な水田が開け、南西~西にかけて龍ヶ崎市街地・驥馬の台地を望むことができる。また、遠方には、小貝川・利根川・千葉県まで眺望できる位置に所在している。水田との比高は、約18mになる。

第2節 歴史的環境

龍ヶ浦と利根川に挟まれた稻敷台地は、県内でも有数の遺跡分布地として早くから考古学界の注目を集めてきた地域である。特に、明治16年、飯島魁・佐々木忠次郎博士や、八木英三郎博士により検証された陸平貝塚(美浦村)を筆頭に、明治37年、大野延太郎博士により調査された愛宕山古墳(龍ヶ崎市)や、大正14年、清野謙次博士によりその大要が紹介された所作貝塚(桜川村)など、周知されている著名な遺跡が数多く存在している。これらの遺跡は、龍ヶ浦から櫻浦を経て龍ヶ浦より龍ヶ崎方面に通じるところの、小野川やその支流を望む台地に所在している。この地は、水陸交通の要衝にあって、このように自然の地の利を得て人々の生活が古くから営まれてきた。

龍ヶ崎市を含んだ稻敷郡の、原始・古代遺跡を昭和62年発行の「茨城県遺跡地図」に求めると、縄文時代160遺跡、弥生時代21遺跡、古墳時代194遺跡を数えることができる。その中には、昭和57年2月に国指定史跡となった縄文時代後・晩期の広畠貝塚(桜川村)を始めとし、縄文時代前期の真津貝塚(美浦村)、中・晩期の小山台遺跡(革崎町)、後・晩期の椎塚貝塚(江戸崎町)、法堂遺跡(美浦村)、弥生時代の巖内遺跡、古墳時代前期の原1号墳(桜川村)、中・後期の尾島祭祀跡(桜川村)、後期の木原台古墳(美浦村)などが特に知られている。

龍ヶ崎市北部台地の南東に所在する桜山古墳周辺は、竜ヶ崎ニュータウン建設に伴う当教育財團の発掘調査によって、地域的に時代の変遷を追うことができるようになった。(第2図、表1)

調査した中で最も古い遺跡としては、沖餅遺跡があり、先上器時代終末期に属する舟底形石器が削器などとともに出土した。同一台地上の松葉遺跡、赤松遺跡からも先十器時代の遺物と思われる石器が出土している。

縄文時代に入ると、北竜台の別所集落の西方にある廻り地B遺跡からは、早・前期の住居跡や炉穴・疊群が検出され、土器片や石器類が出土している。前期では龍ヶ岡の貝原塚集落北方の町山遺跡の集落跡があげられ、前・中期の遺跡としては、ほぼ環状に分布する住居群と袋状土坑群が検出された前述の赤松遺跡がある。中期になると、別所集落の西側、谷津を隔てた舌状台地上に所在する小集落を検出した打越A遺跡、打越C遺跡、地点貝塚を伴う南北島遺跡2区がある。また、北竜台の調馬集落の北西台地上にある廻り地A遺跡は、中期末から後期前半の時期にかけての大集落で、地点貝塚や多くの土坑群を伴っている。さらに、北竜台の南東端部に位置する仲根台B遺跡からも後期前半の遺構・遺物が検出されている。しかし、現在のところ龍ヶ崎市内では、晩期の遺構を伴う遺跡は調査されていない。

弥生時代では、龍ヶ岡の南部、幅400~500mの広い屋代台地上に、外八代遺跡、屋代A遺跡、屋代B遺跡、長峰遺跡がある。特に、屋代A遺跡からは、人形住居跡3軒を含む28軒の住居跡が

検出され、継続する屋代B遺跡の24軒と合わせると、当地方での後期集落と捉えることができる。

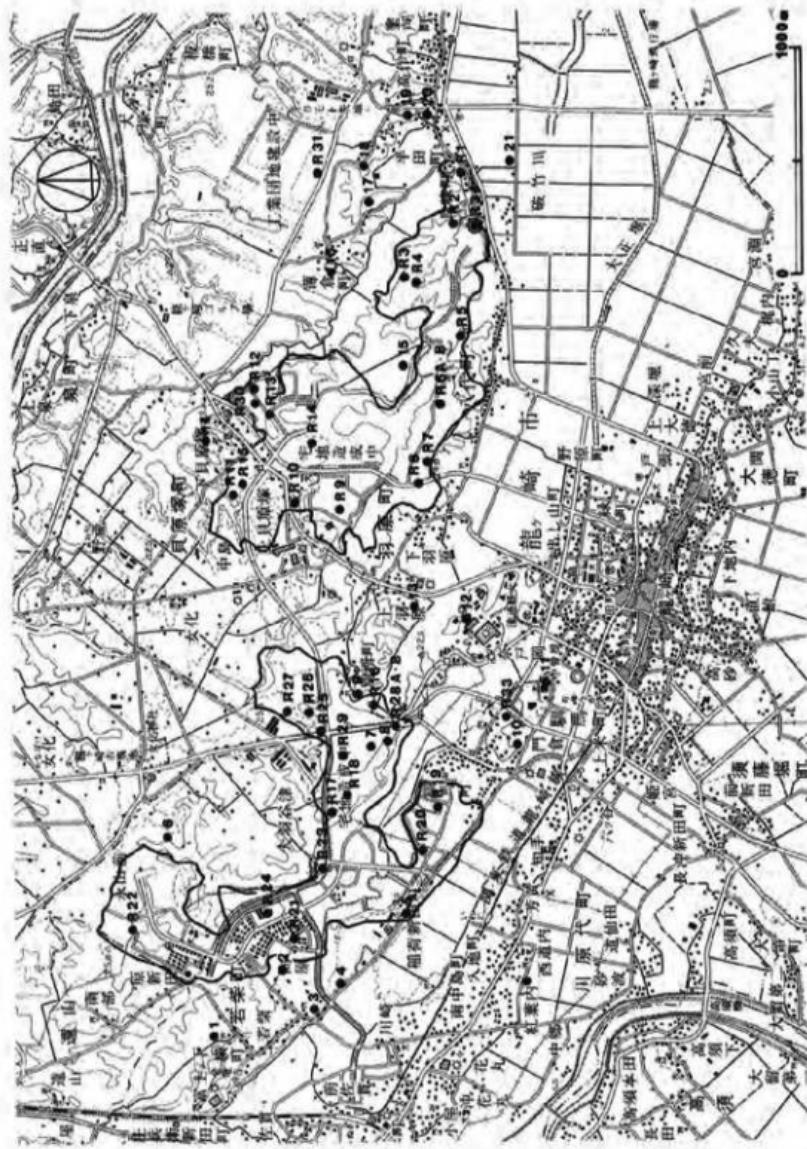
古墳時代の遺跡の分布を見ると、龍ヶ崎市東部の桜山古墳をも含む龍ヶ崎台地縁辺部に連なるように集中している点が注目される。前期の遺跡では、4基の方形周溝墓が検出され大羽谷沖遺跡の墓域として捉えられた廻り地A遺跡や、動物形土製品を出土した松葉遺跡がある。中期の遺跡としては、住居跡47軒が検出された平台遺跡があり、一辺が9mを越す大形住居跡の存在も確認されている。その他、屋代A遺跡では古墳時代と奈良・平安時代の住居跡が検出され、外八代遺跡では古墳時代前・後期にかけての集落跡が確認されている。当遺跡に隣接する長峰遺跡も、前期から中期にかけての住居跡が確認され、長峰古墳群とともに、35基の古墳が調査されている。古墳では、他に、調査されたが古墳と認められなかった稻荷塚古墳、未調査の稻荷古墳、泰戸岡古墳、そして、前述の愛宕山古墳などが知られている。

中世には、貝原塚集落の南方に前清水遺跡があり、地下式壙を含む土坑群が検出されている。また、城館跡として調査された外八代遺跡、屋代B遺跡、堀の一部が調査された長峰遺跡などがある。その他、周辺には、駒馬城跡、貝原塚城跡などが所在する。

龍ヶ崎市の北部台地には、このように多くの遺跡が存在し、原始・古代・中世にかけて、人々の生活が営まれていたことが窺えるのである。

注・参考文献

- (1) I. IJIMA, AND C. SASAKI, 「OKADAIRA SHELL MOUNDS AT HITACHI」,
(TOKYO DAIGAKU SCIENCE DEPARTMENT, MEMOIR VOL.1, PART1) TOKYO DAIGAKU 1883年
- (2) 大野延太郎「竪籠圓墳ヶ崎免見の車輪上唇に就いて」『東京人類学雑誌』20-299 東京大学人類学教室 1905年
- (3) 清野謙次「日本原人の研究」 論文集 1925年
- (4) 「茨城県遺跡地図」 茨城県教育委員会 1987年
- (5) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書3「沖削道跡」 茨城県教育財團 1980年
- (6) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書1「松葉遺跡」 茨城県教育財團 1979年
- (7) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書4「赤松遺跡」 茨城県教育財團 1980年
- (8) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書5「前清水遺跡・打越A遺跡・仲根台塚・人羽谷神遺跡・打越C道跡・廻り地B道跡」 茨城県教育財團 1981年
- (9) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書9「町田道跡・仲根台B道跡」 茨城県教育財團 1984年
- (10) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書10「南三島遺跡1・2区」 茨城県教育財團 1984年
- (11) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書7「廻り地A道跡」 茨城県教育財團 1982年
- (12) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書2「外八代遺跡」 茨城県教育財團 1980年
- (13) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書6「成沢遺跡・屋代A道跡」 茨城県教育財團 1982年
- (14) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書33「屋代B I 遺跡」 茨城県教育財團 1985年
- 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書40「屋代B II 遺跡」 茨城県教育財團 1986年
- (15) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書58「長峰遺跡」 茨城県教育財團 1990年
- (16) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書19「平台遺跡」 茨城県教育財團 1982年
- (17) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書45「屋代B III 遺跡」 茨城県教育財團 1988年
- (18) 繁指定史跡、龍ヶ崎市駒馬町字下宿に所在。春日源國の立築った城。興治5年(1334年)落城
- (19) 龍ヶ崎市貝原塚町字城山に所在。



第2図 桧山古墳周辺遺跡分布図

表1 桜山古墳周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種類	遺跡の時代		番号	遺跡名	種類	遺跡の時代	
			先土器	縄文				先土器縄文	弥生
R1	長峰城跡	城館	跡	跡	○	R28-A	仲板台原群	家屋(3・4号)	その他
R2	長峰遺跡	城館	跡	跡	●	R28-B	仲板台B遺跡	奥落	跡
R3	十三塚跡	塚	群	跡	●	R29	鳴り地B遺跡	集落	跡
R4	尾坪台遺跡	集落	跡	跡	●	R30	白瀬寺遺跡	包	地
R5	外八代遺跡	集落跡	城館	跡	●	R31	西魔古墳	墳	冢
R6-A	尾代A遺跡	城館跡	集落跡	跡	●	R32	和荷峰古墳	墳	跡
R6-B	尾代B遺跡	城館跡	集落跡	跡	●	R33	山王遺跡	集落	跡
R7	橋荷塚古墳群	古	群	跡	○	R34	猿山古墳	古墳	塚
R8	南三島遺跡	集落	跡	跡	●	1	金櫻遺跡	集落	跡
R9	ダゾンゴ	河原	塚	群	○	2	林遺跡	路	跡
R10	引山塚群	塚	群	跡	●	3	岩柴城跡	城	跡
R11	かがみ塚	塚	跡	跡	○	4	菅原遺跡	断面	跡
R12	高井城下塚跡	城館跡	寺院跡	跡	○	5	福荷古墳	古墳	塚
R13	前泊水遺跡	集落跡	貝塚・環状	跡	●	6	永山前遺跡	集落	跡
R14	坂下遺跡	塚	群	跡	●	7	船根台遺跡	集落	古墳
R15	町山遺跡	集落	貝塚	跡	●	8	余戸頭古墳群	古墳	群
R16	行部内遺跡	集落	高	跡	○	9	堂ノ下貝塚	貝塚	跡
R17	大羽谷津遺跡	集落	高	跡	●	10	黒馬城跡	城	跡
R18	鳴り地A遺跡	集落	高	跡	●	11	愛宕山古墳	古	塚
R19	平台遺跡	集落	高	跡	●	12	森ノ岡新紀遺跡	祭祀	跡
R20	城沢遺跡	集落	高	跡	●	13	西花輪貝塚群	貝塚	跡
R21	松妻遺跡	集落	高	跡	●	14	日原塚城跡	城	跡
R22	庚申塚遺跡	集落	高	跡	○	15	向井原遺跡	集落	跡
R23	冲倒遺跡	集落	高	跡	●	16	西平底跡	集落	跡
R24	赤松遺跡	集落	高	跡	●	17	馬込荷遺跡	集落	跡
R25	打越A遺跡	集落	高	跡	●	18	愛宕山遺跡	城	跡
R26	打越C遺跡	集落	高	跡	●	19	半田遺跡	集落	跡
R27	ウツブタ遺跡	集落	高	跡	●	20	巻嶺山遺跡	城	跡
R28	仲板台原群	原群	(1・2号)	跡	●	21	向須賀遺跡	包	地

●は発掘調査を実施した遺跡である。

第3章 桜山古墳

第1節 古墳の概要と記載方法

1 古墳の概要

桜山古墳は、茨城県遺跡地図に見る「長峰古墳群」の一画に位置している。その中の多くの古墳が、標高27m程の稲敷台地上に存在しているのに対し、本古墳は、台地南端の小谷を挟んだ60m程南側の、標高23.3mの独立丘上に構築されている。発掘調査前の現況としては、墳頂部に「嘉永四年辛亥(1851)九月吉日」の刻印のある石の祠が祀られていた。景観としても、3本の巨木が御神木として繁り神域としての様相を呈していた。

本古墳は、独立丘の標高約13.6mより上位に構築された、N-76.4°-Wに主軸方向を持つ前方後円墳である。全長は、71.2mで、後円部直径38.8m、後円部高さ8.9m、前方部長さ32.4m、前方部端部幅30.6m、前方部高さ3.6mの規模を有している。墳丘は、自然小丘の尾根上の地山を整形した後に盛土をしている。

埋葬施設は、後円部中央よりやや南寄りの墳頂に、上端で、11.0m×3.3m、深さ0.5mを掘り立てて、その底面に8.3m×1.5mの規模を有する長大な粘土槨を構築している。構造的には、中央部に膨らみを持ち、その断面は割竹形木棺埋納の痕跡を良く残している。また、蓋石や周溝の存在は認められなかった。

遺物は、粘土槨の床面より大刀1口、剣1口、短剣1口、刀子1点、箋1点、鉄鎌3点、管49点が出土した。これらは、上蓋部を覆っていた粘土が木棺の朽ちるに伴い陥没し、床面と接着した間に遺存していた。その接着部には、有機質の腐蝕土と粘土内の鉄分が酸化した酸化鉄とから成ると思われる赤褐色の土層が約1.5cm程の厚さで検出された。その他の遺物は、後円部盛土内から繩文時代早期の田戸下層式土器片が6片、埋葬施設覆土内から弥生式土器片が6片、古式土器片が1片出土した。また、後円部東斜面中腹からは、中世のものと思われる崩れた五輪塔が2基と、0.3m程の深さから、人骨を埋納した陶器、そして、後円部東斜面の墳丘裾部の表土内から、「寛永通寶」を中心とする古銭が10点出土した。

注

- (1) 長峰遺跡として調査され、長峰城の堀の一部を含め、弥生時代の住居跡51軒、古墳時代の住居跡68軒(前期52軒、後期16軒)、時期不明5軒、古墳35基(円墳29基、方墳2基、前方後円墳4基)等が、確認されている。

2 遺構・遺物の記載方法

本書における遺構・遺物の記載方法は、以下の通りである。

(1) 遺構・遺物の実測図中の表示



(2) 遺構実測図の作成方法と掲載方法

- 各土層断面図は、原則として縮尺20分の1の原図を2分の1に縮小したものを净書して版組し、それを更に2分の1に縮小して掲載した。
- 墳丘については、縮尺200分の1の地形図を净書し、2分の1に版組みしたものを掲載した。
- 埋葬施設は、縮尺20分の1の原図を净書し、2分の1に版組みしたものを掲載した。
- 実測図中のレベルは、標高であり、m単位で表示した。また、同一図中で同一標高の場合に限り一つの記載で表わし、標高が異なる場合は各々表示した。
- 墳丘・埋葬施設からの出土遺物は、(1)で示した記号を用い、遺構平面図に表示した。

(3) 遺物実測図の作成方法と掲載方法

- 埋葬施設内出土遺物の位置表示は、小グリッドを16等分したメジャー(measur)を使用した。表記法は、右図に示すように番号の前に「m」を付け、「B1j2m1o」のように表示した。
- 土器の実測図は、中心線の左側に外面、右側に内面と断面を示した。土器拓影図は、右側に断面を示した。
- 遺物は、原則として縮尺1分の1の原図を净書し、2分の1に縮小して掲載したが、大きさ・形状により3分の1の縮小もある。

B1j0	1	2	3	4
5	6	7	8	
9	10	11	12	
13	14	15	16	

例 • B1j0m1

B1j1

(4) 土層の分類

遺構の堆積土については、調査時に観察記録した結果に基づき、色調と含有物を下記の觀点で表記した。色調と含有物の量については、「新版標準土色帖」(小山忠正・竹原秀雄編著・日本色研事業株式会社)を使用し、Hue7.5YRを基準とした。

なお、含有物の量については、少量(面積の10%未満)検出されたものを基準とし、中量(10%以上30%未満)、多量(30%以上)と表現した。

第2節 墳丘

本古墳は、台地から切り離された独立丘上に標高約13.6mより上位に構築されている。後円部は標高23.3mで、前方部は東西に延びた毛根を利用していている。規模は、全長71.2m、後円部直径38.8m、後円部高さ8.9m、前方部長さ32.4m、前方端部幅30.6m、前方部高さ3.6mを測る前方後円墳である。

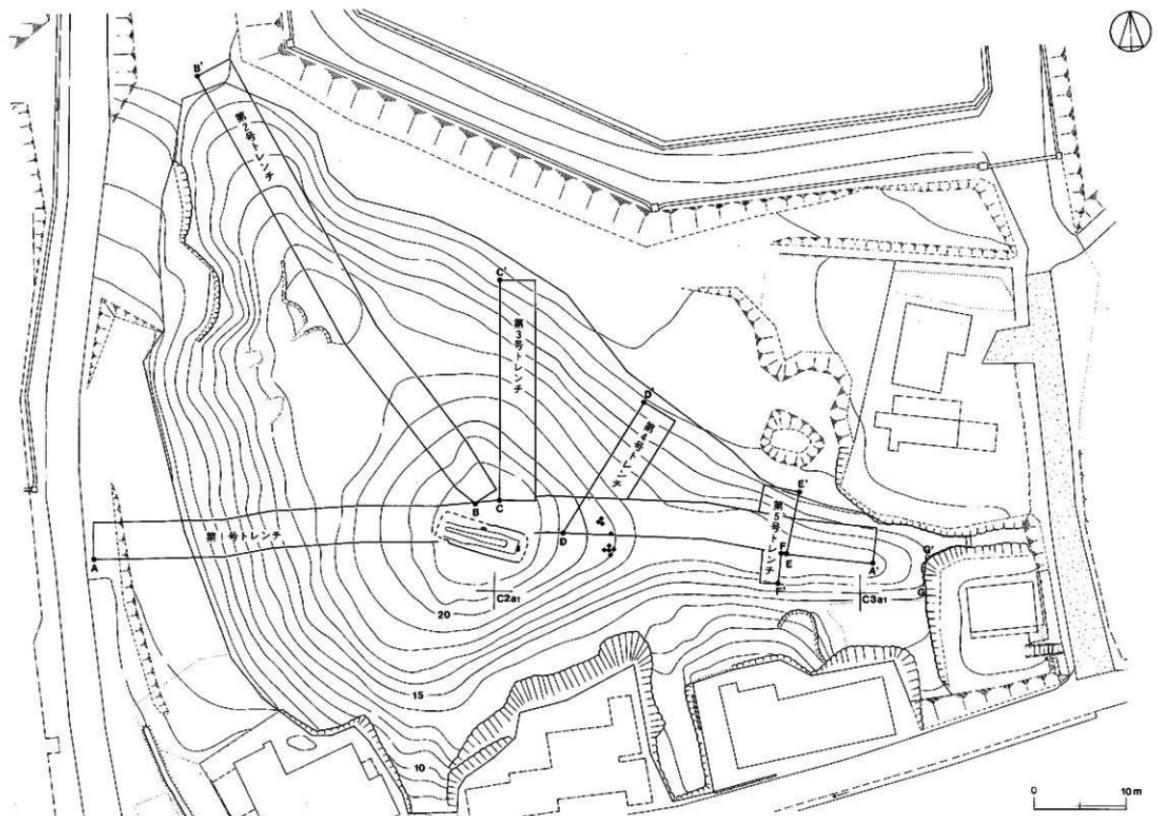
注：本古墳の主軸方向は、古墳と埋葬施設の主軸方向とが一致している大洗町の鏡塚古墳、つくば市の山木古墳、八郷町の丸山古墳の例に倣って想定した。規模は、その主軸をもとに、墳丘の盛土範囲と、地形図(第8図)から推定した。

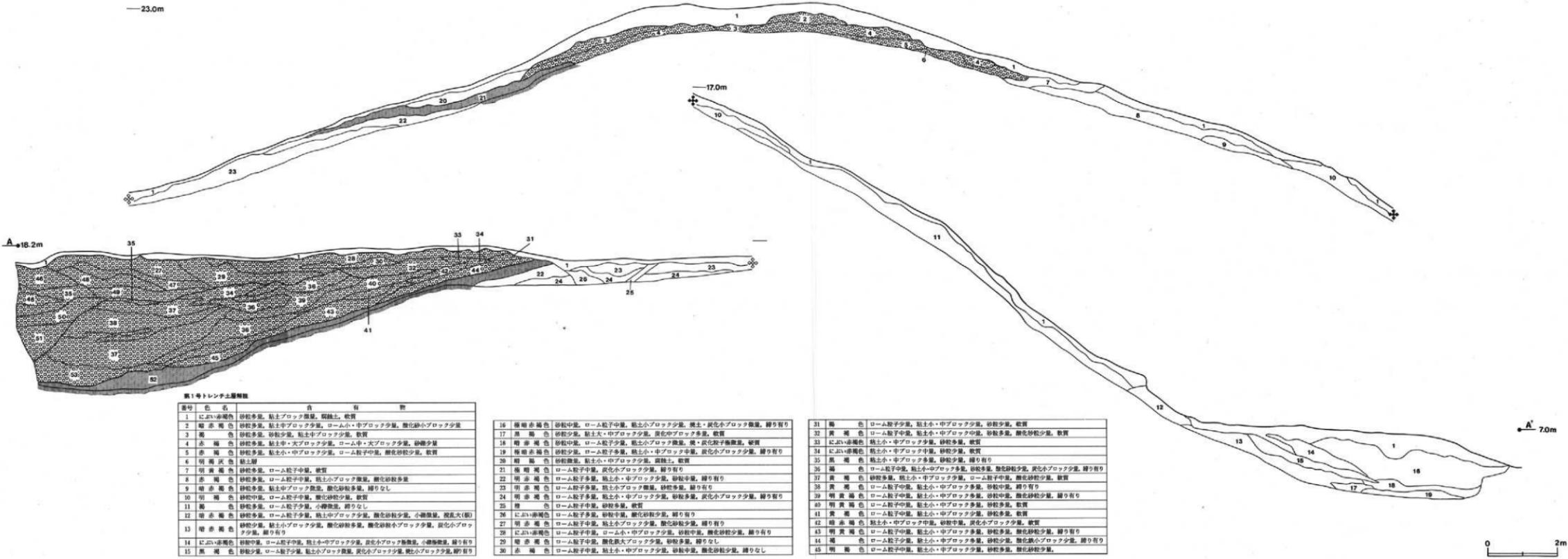
本古墳の調査は、西幅4mのトレンチを5本設定し、土層の観察を行い墳丘の構築状態や埋葬施設の確認を行った(第3図)。その結果、第1号トレンチ土層断面に示す通り(第4図)、後円部と前方部に盛土が検出され、墳頂部では、その盛土内に埋葬施設が確認できた。埋葬施設については、後述することとし、墳丘の状況について記述する。

後円部の盛土は、第1号トレンチ土層断面で観察すると、東側斜面では標高21.1mより上部に、西側斜面では標高20.9mより上部に確認されている。盛土は、砂粒を多量、粘土ブロックを少量含んだ軟質な土質である。第2号トレンチ土層断面では、南東端から標高21.7mの地点まで上記と同質の盛土が検出された。その下層は、厚さ0.58mの浅黄色の自然粘土層で、砂粒を多く含んでいる。標高21.7mから下位については、砂層が表土下に認められた(第5図)。第2号トレンチ南東端部の標高21.6m地点には旧表土上面が確認できた。第3号トレンチ土層断面では、南端から標高18.9mの地点まで旧表土上に盛土が検出された(第6図)。上質は、ローム粒子を多量に、ローム中ブロックを中量含む縮りのある褐色土である。また、標高18.9mの上層には、後述する前方部端と同質の灰白色の粘土・中ブロックを多量に含む浅黄色土が、堅固に積まれていた。第4号トレンチ土層断面では、南西端から標高15.2mの地点まで、第3号トレンチ土層断面と同質の浅黄色土と、灰白色の粘土小・中ブロックを多量に含んだ褐色土が互層を成しており、厚い所では1.1mであった。その下層は、旧表土面であった(第6図)。

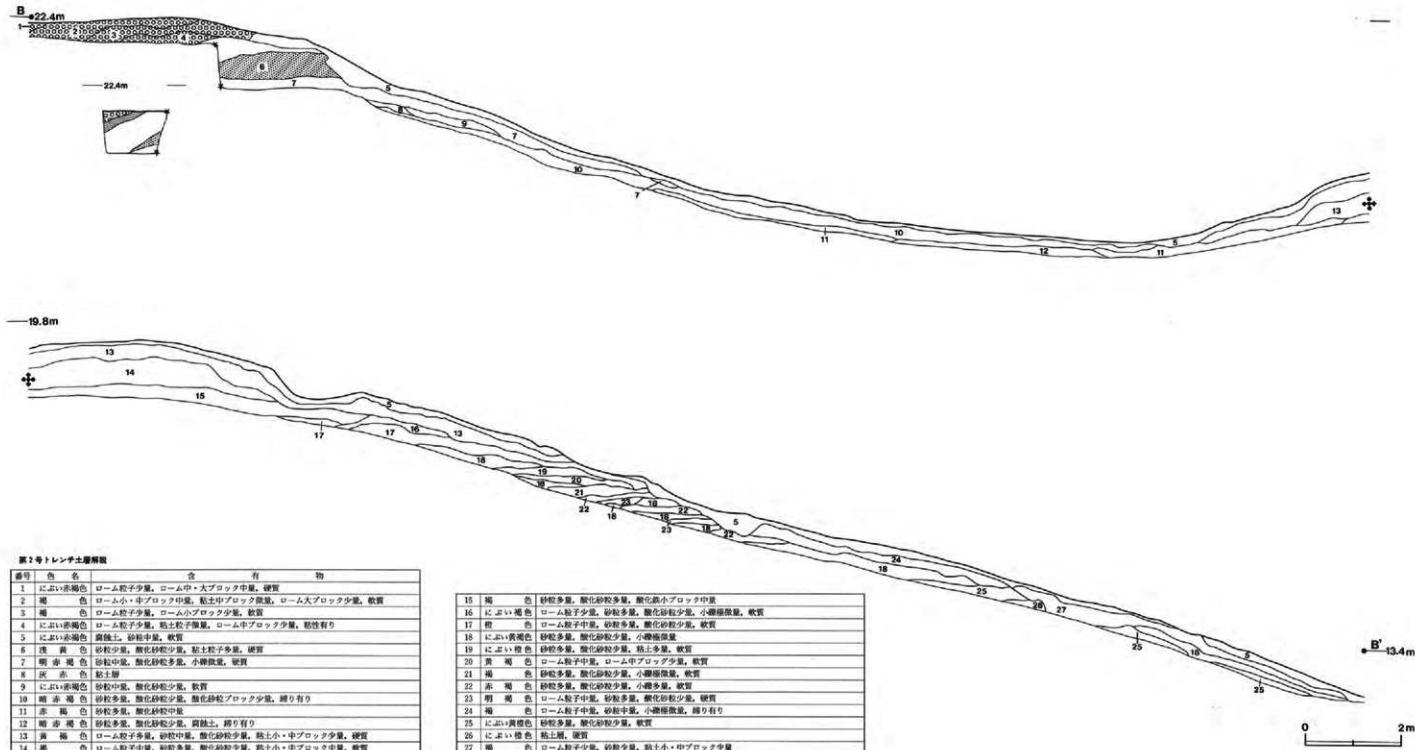
後円部の構築状況は、第3号トレンチ土層断面で観察すると、標高21.4mの地点で旧表土が平坦に地山整形され、その上層に盛土により墳頂部を構築していることが確認される。埋葬施設は、後円部や南寄りの墳頂下1.5mに検出され、上端で長さ11.0m(推定)×幅3.3mで、深さ0.5mほどの長方形に掘り窪めて構築している。粘土層は、その底部から検出されている。

前方部の盛土は、第1号トレンチ土層断面の東部に、厚い所で3.8mが確認できた。盛土の状態は、旧表土上に後円部でも確認された灰白色の粘土ブロックを多量に含む浅黄色土を積み、その上層に粘土小・中ブロックを多量に含む褐色土が積まれていた(第4図)。また、第5号トレンチ



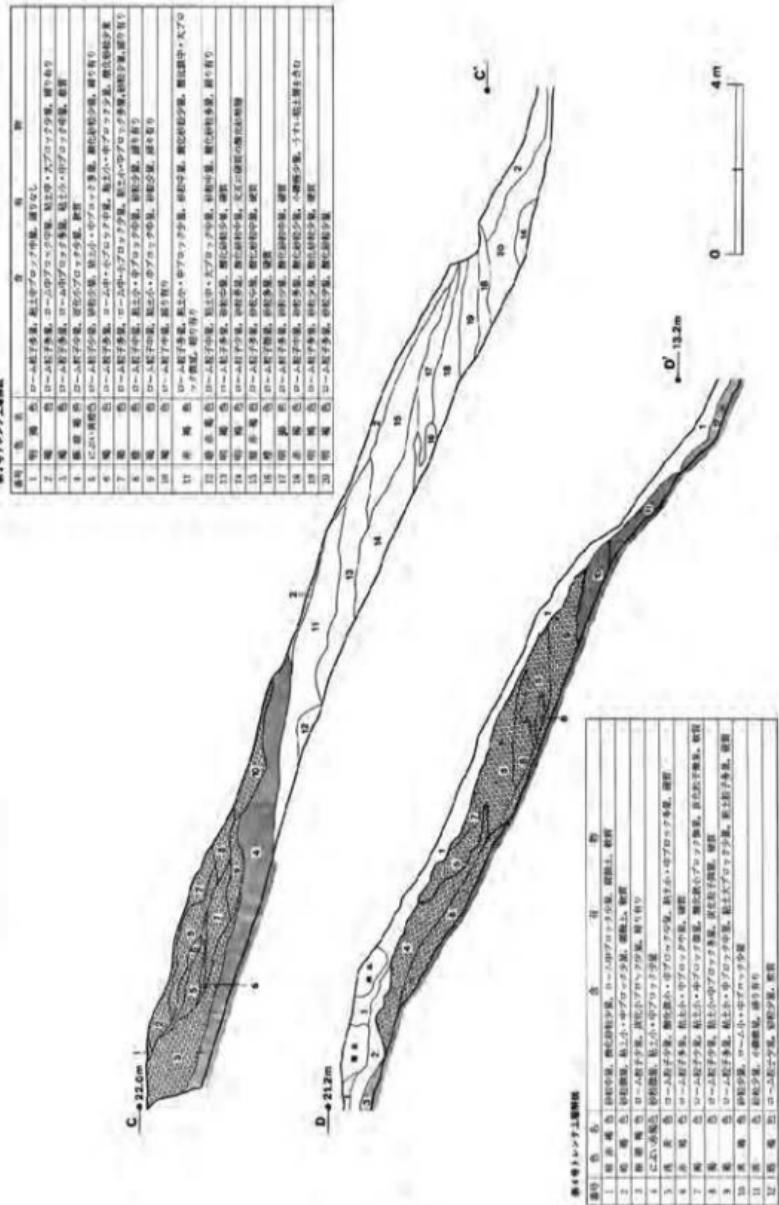


第4図 第1号トレントレンチ土層断面図

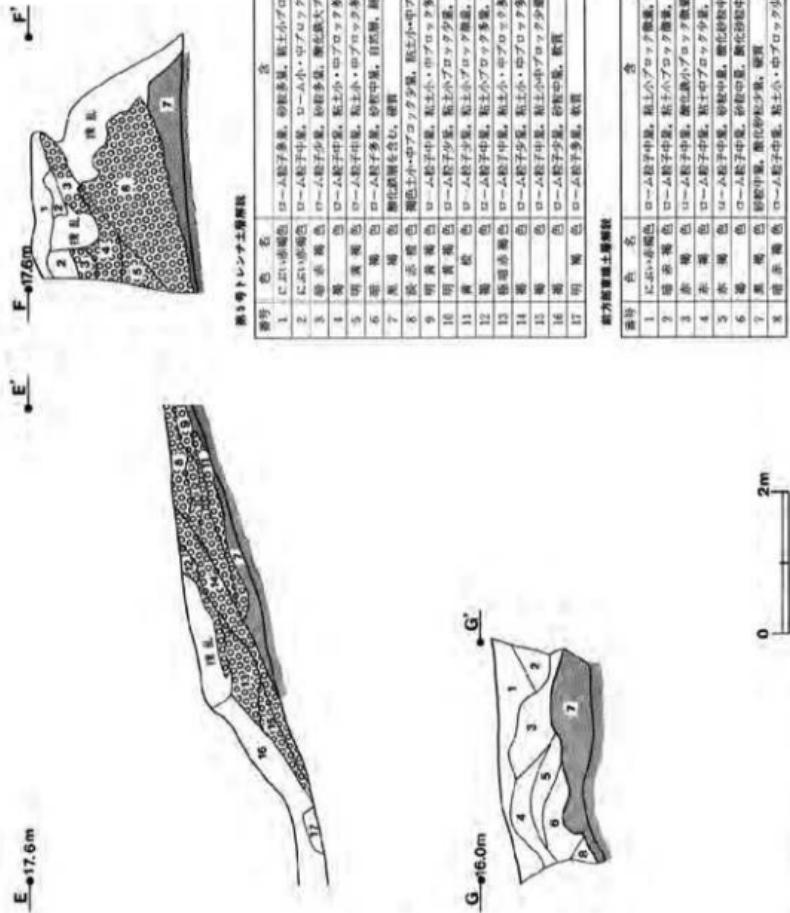


第5図 第2号トレンチ土層断面図

第3号トレント土層断面図

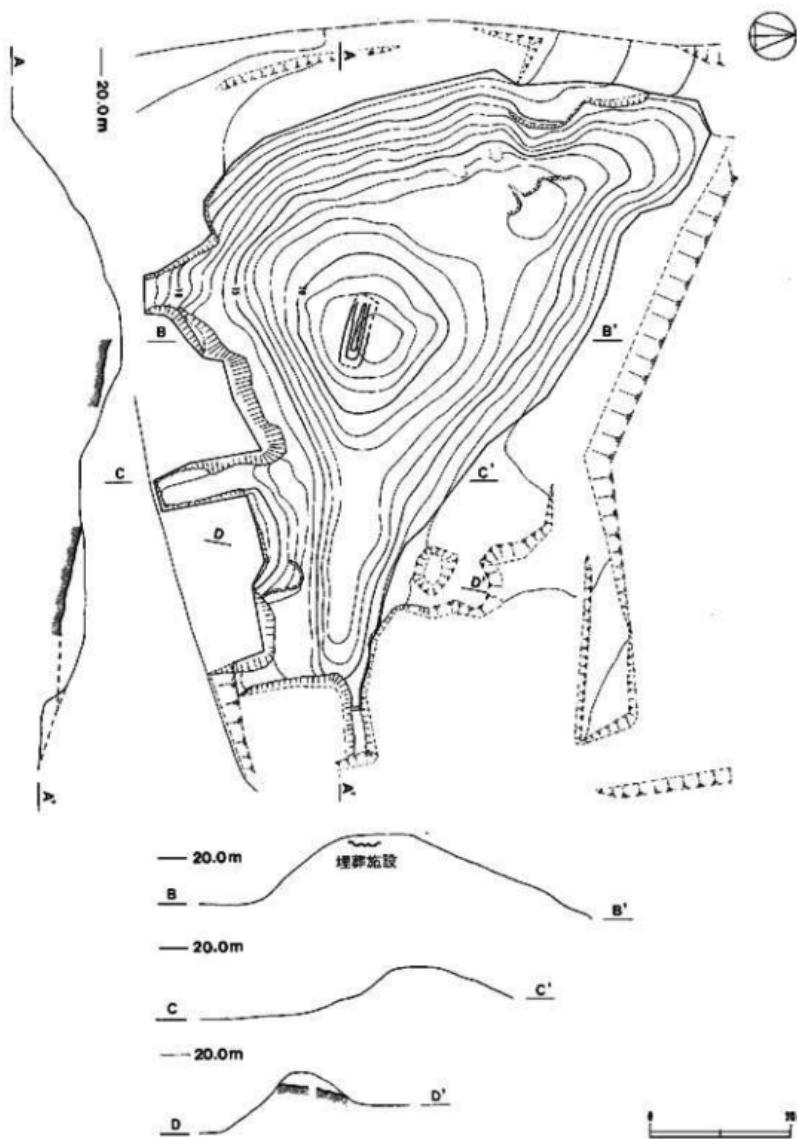


第7図 断5号トレンチ・前方部裏側土層断面図



番号	名	含	性	特
1	にじいろい褐色	ローム粘子中量、砂多量、粘土小・中ロック少量、鐵粉少、鐵粉少、鐵粉少	粘土	
2	にじいろい褐色	ローム粘子中量、ローム粘子少、粘粉多量、鐵粉微量、鐵粉微量大・ロック多量	粘土	鐵粉少
3	暗赤褐色	ローム粘子少、粘粉多量、鐵粉微量、鐵粉微量大・ロック多量	粘土	鐵粉少
4	褐色	ローム粘子中量、粘土少、ローム粘子少量、鐵粉微量	粘土	鐵粉少
5	暗赤褐色	ローム粘子中量、粘土少、ローム粘子多量、鐵粉微量	粘土	鐵粉少
6	褐色	ローム粘子多量、粘粉中量、自然鐵、鐵粉少	粘土	鐵粉少
7	黒褐色	褐色少・中・ロック少量、粘粉少・中量、砂多量、砂多量、鐵粉微量少量、鐵粉少	粘土	鐵粉少
8	淡赤褐色	褐色少・中・ロック少量、粘土少・中・ロック多量、砂多量、鐵粉多量、鐵粉少	粘土	鐵粉少
9	明黄褐色	ローム粘子中量、粘土少・中・ロック多量、砂多量、鐵粉少	粘土	鐵粉少
10	明黄褐色	ローム粘子少量、粘土少・中・ロック多量、砂多量、鐵粉少	粘土	鐵粉少
11	黃褐色	ローム粘子少量、粘土少・中・ロック多量、砂多量、鐵粉少	粘土	鐵粉少
12	褐色	ローム粘子中量、粘土少・中・ロック多量、砂多量、鐵粉少	粘土	鐵粉少
13	褐色少褐色	ローム粘子中量、粘土少・中・ロック多量、砂多量、鐵粉少	粘土	鐵粉少
14	褐色	ローム粘子少量、粘土少・中・ロック多量、砂多量、鐵粉少	粘土	鐵粉少
15	褐色	ローム粘子中量、粘土少・中・ロック少量、砂多量、鐵粉少	粘土	鐵粉少
16	褐色	ローム粘子少量、粘粉中量、鐵粉少	粘土	鐵粉少
17	明褐色	ローム粘子多量、鐵粉少	粘土	鐵粉少

番号	名	含	性	特
1	にじいろい褐色	ローム粘子中量、粘土小・中ロック少量、鐵粉なし、樹木による鐵粉少	粘土	
2	暗赤褐色	ローム粘子中量、粘土小・中ロック多量、鐵粉なし、樹木による鐵粉少	粘土	
3	暗褐色	ローム粘子中量、粘土小・中ロック少量、鐵粉少	粘土	
4	赤褐色	ローム粘子中量、粘土少・中・ロック多量、鐵粉少	粘土	
5	赤褐色	ローム粘子中量、粘粉中量、鐵粉少	粘土	
6	褐色	ローム粘子中量、粘粉中量、鐵粉少	粘土	
7	黒褐色	褐色少量、鐵粉少量、鐵粉少量、鐵粉少	粘土	
8	暗赤褐色	ローム粘子中量、粘土少・中・ロック少量、鐵粉少	粘土	

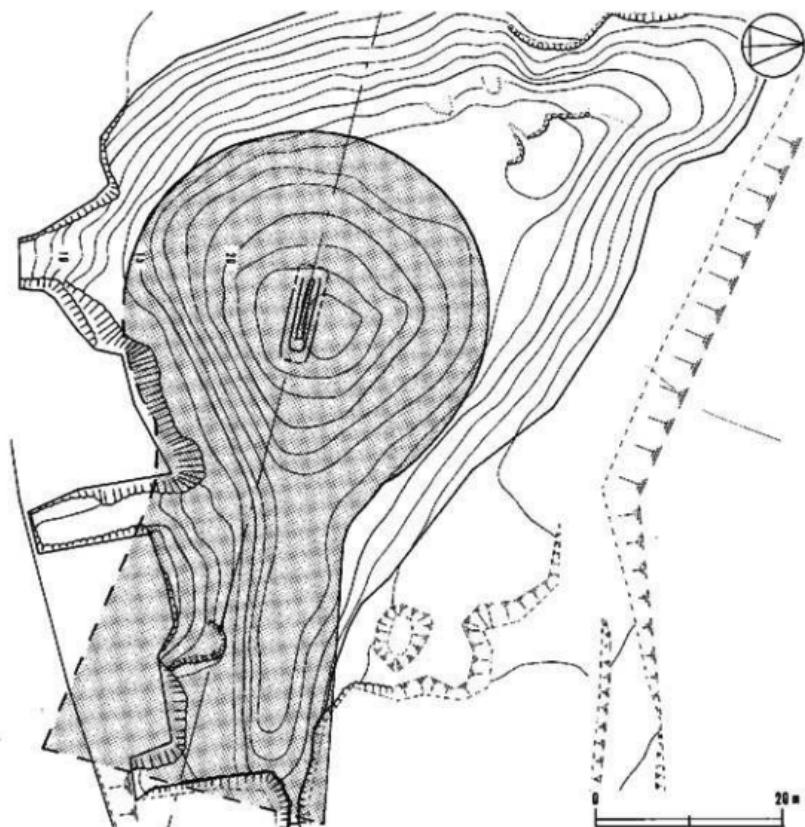


第8図 填丘断面図

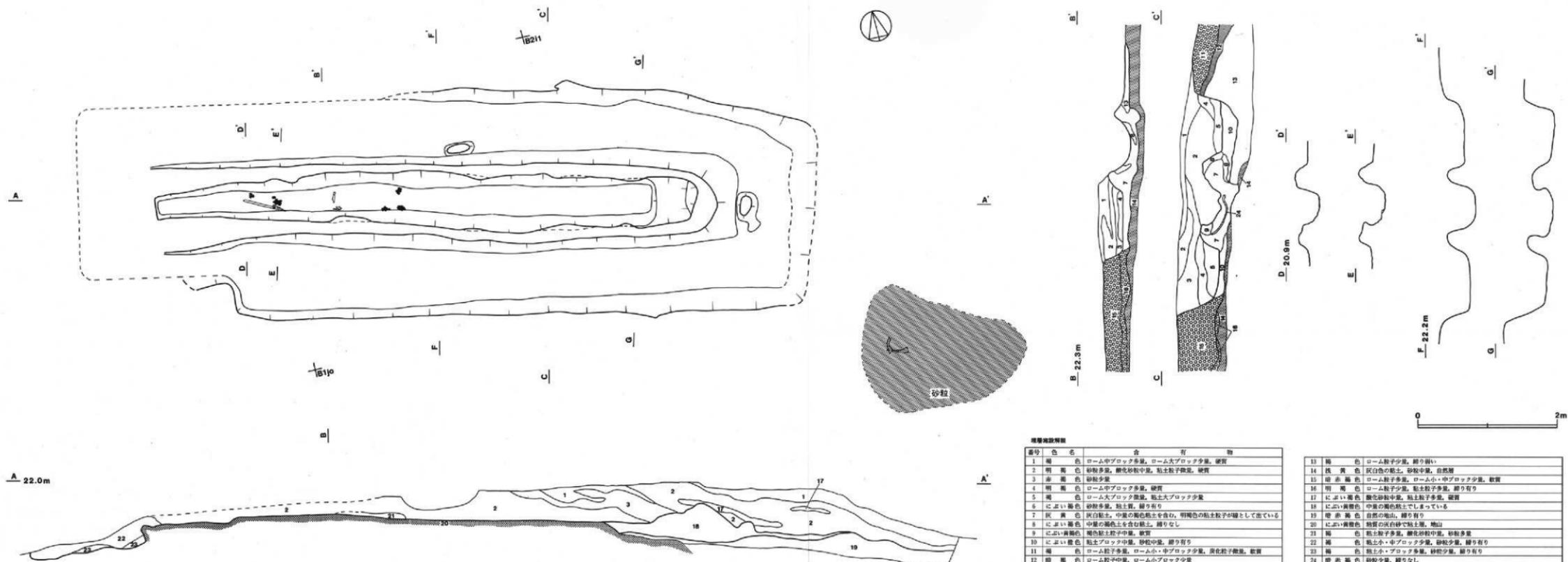
土層断面(第7図)の北側でも、前方頂部から標高13.6m地点まで盛土が確認された。南側では、旧表土表面が南側に上昇していることが確認されている。

これらのことから、前方部は、後円部東斜面から前方部の尾根上にかけては、第1号トレンチ土層断面に観察されるように、旧表土を削り、地山整形後その上に盛土して構築していることが確認される。また、前方部の中央付近より東側で、旧表土面が下降している場所に盛土され、南北の傾斜地では、狭い馬の背状の尾根の両面に交互に盛土し構築されている。

以上、本古墳は、構築法として自然丘の尾根部の地山を整形し、後円部上位及び前方部に盛土し墳丘としている古墳である。



第9図 墳形想定図



第10図 埋葬施設実測図

第3節 埋葬施設

本古墳の埋葬施設は、後円部中央のB1ii区、B2ii区の墳頂部の盛土を、深さ1.5mまで掘り下げた地点に検出されている。主軸方向は、東西で、N-76.4'-Wである。掘り方の断面形は、南北でほぼ逆台形状を呈しているが、東壁は、はっきりと検出することができず、西壁及びその付近の底面も、削平されており、東西の掘り方の形状は確認できなかった。掘り方の規模は、推定で、上端東西11.0m×南北3.3mで、深さ0.5m程である。底面の広さは、推定で、東西10.3m×南北2.8mである。壁は、土層断面のC(第10図)を観察すると、北壁側は、旧表土や褐色土層を掘削しており、南壁側は、盛土を掘り込んでいる。また、底面の構築は、東側は、粘土層が下降する為、その上層の褐色土層を削平し、柳と同質の粘土が貼られており、西側は、土層断面のB(第10図)で観察すると、砂粒を含んだ灰黄色の自然粘土層を削平して造られている。底面の、ほぼ中央部からは粘土層が検出されている。

覆土は、砂粒を多量に含む明褐色土を中心で、いずれの層も砂粒と粘土粒子が混入して、硬く結まっている。

粘土層は、掘り方底面に、主軸方向(N-76.4'-W)を東西にもち粘土で被覆されており、上蓋部が粘土層床面に陥没した状態で検出されている。規模は、外法で長さ8.3m、東小口部幅1.3m、中央部幅1.3m、西小口部幅1.3m、内法で長さ7.1m、東小口部0.7m、中央部0.8m、西小口部0.3mである。その形状は、中央部に膨らみを持ち、西の小口部が、特に狭くなる舟形状を呈している。粘土層の構築状況は、各トレンチの断面に直径0.2m程の円形の粘土が確認できたことから、円柱状の粘土を木棺の両側に置いて棺をおさえ構築されているものと思われる。東西小口部においても、丸太状の粘土が置かれていたものと思われるが、東小口部では、多量の粘土を用いて塞がれており、西小口部では塞がれていた痕跡は確認できるものの削平されている為詳細は不明である。

また、木棺の上部は、粘土で被覆されていたものと思われ、粘土層の上蓋部は、木棺の腐蝕に伴い床面に陥没した状態で検出されている。床との間隙には、5~15mm程度の厚さで暗褐色土層が確認され、柳内の遺物は、全てこの層から出土している。

壁面は内窪しており、特に、中央部から東部にかけてその形状が著しく、埋葬施設に割竹形木棺が埋納されていたことが推測された。また、それを裏付けるように、柳内の南壁面に木棺外壁の圧痕と思われる痕跡が残されていた。粘土層内の床のレベルは、東部で、標高21.44m、中央部で、標高21.46m、西部で、標高21.42mである。

・柳の粘土は、灰黄色の粘性の強い硬質の粘土であり、表面や内部に橙色の酸化鉄の沈着が確認された。

第4節 埋葬施設内出土遺物

遺物は、粘土櫛内の中央部より西側の床面から出土している。人骨はみられず、副葬品は、大刀1口、剣1口、短剣1口、刀子1点、鎧1点、管玉49点である。これらの副葬品の出土状況は、出土位置から大きく二つのグループに分けることができる。一つは、粘土櫛中央部の管玉出土地点と短剣・刀子・鎧の出土している位置のグループである。二つ目は、大刀・剣が重なり合って出土した粘土櫛西部のグループである(第11図)。

次に、それぞれの遺物について詳細に記述する。

1. 管 玉

管玉は、粘土櫛の中央部及び西部の4地点(A～D)から検出されている。A地点は、粘土櫛中央部のやや西寄りの北壁近くに有り、その13.5cm真南にはB地点が検出されている。B地点の、6.7cm西にはC地点が隣接している。D地点は、前記の3地点からおよそ80cm西の大刀出土位置に検出されている。各地点の管玉の出土数は、A地点から8点、B地点から15点、C地点から8点、D地点から18点で、全体の合計は49点である。

(1) A地点出土管玉 (8点) (第12図)

本地点から出土した管玉は、Bliome区、粘土櫛中央部やや西寄りの北壁付近に出土し、粘土櫛の主軸を対称軸にして、ほぼ南に13.5cmの隔たりをもって、B地点と線対称の位置に検出されている。また、南西へ20.5cmの隔たりをもって、C地点が検出され、西へ88.2cmを隔て短剣が出土している。これら8点の管玉は、粘土櫛床面上に、長径10.8cm×短径4.2cmの梢円形状の範囲にNo3・4・5・6・7・8が出土し、その北1.4cm隔ててNo1・2が出土している(第11図)。

これらの管玉(表2)は、ほぼ中央に穿孔が施された円筒形を呈し、平均値で、外径0.57cm、長さ2.12cm、重さ2.1gである。No6を除いては精巧な造りであり、No8は、全体(49点)の中で外径・重さが最大で、材質的にも他と異なり、光沢のある青緑色の輝緑岩で造られている。他の7点は、蛇紋岩で造られており、No1・4・5は光沢もある。

(2) B地点出土管玉 (15点) (第12図)

本地点から出土した管玉は、Bliome区とBliomie区、粘土櫛の中央部やや西寄り南壁付近床面から集中して出土し、粘土櫛の主軸を対称軸として、ほぼ北へ13.5cm隔てて、線対称の位置にA地点が検出されている。また、西へ6.7cm隔ててC地点が検出され、北西へ92.3cm隔てた位置から短剣が出土している。これら15点の管玉は、長径5.6cm×短径3.0cmの梢円形状の範囲にNo1・2・3・4・5・6・7が2段の重なりをもち出土している。その北には、1cm程隔てて、No10・11・12・13・14・15が重なり合い、その南側からはNo8・9が出土している(第11図)。

これらの管玉の形状(表3)は、中央部に穿孔されたほぼ円筒形を呈し、平均値で、外径0.51cm、

長さ2.22cm、重さ0.9gである。No6・11は僅かに円錐台形状を呈し、色調も同一で、精巧な造りである。No4は、酸化鉄が付着しくすんでいるが、No1・7と共に、これら3点は淡い黄緑色の流紋岩である。No15は、破壊しているものの全体で2番目の長さをもっている。

表2 管玉観察表（A地点）

測定番号	計測値				穿孔	材質	色調	遺存度 (%)	備考
	外径(cm)	長さ(cm)	孔深(cm)	重さ(g)					
1	0.45	(2.11)	0.17	(0.7)	両側	蛇紋岩	深緑色と薄緑色の斑紋	95	
2	0.58	2.72	0.23	1.8	両側	蛇紋岩	灰色がかった緑色 薄緑色の斑紋	100	両端面、幾分割め
3	0.45	1.88	0.20	0.8	両側	蛇紋岩	灰色がかった青色	100	
4	0.42	1.76	0.17	0.6	両側	蛇紋岩	深緑色と青緑色の斑紋	100	
5	0.47	2.10	0.18	1.0	両側	蛇紋岩	深緑色と薄緑色の斑紋	100	
6	0.58	(2.19)	0.26	(1.1)	両側	蛇紋岩	深緑色の中に斑駁状に 薄緑色	90	太い穿孔、下部一 割破損
7	0.54	1.95	0.20	1.1	両側	蛇紋岩	青味がかった灰色	100	
8	1.03	2.29	0.43	7.1	両側	輝緑岩	青緑色	100	外径・重さ最大
平均	0.57	2.12	0.23	2.1				98	

表3 管玉観察表（B地点）

測定番号	計測値				穿孔	材質	色調	遺存度 (%)	備考
	外径(cm)	長さ(cm)	孔深(cm)	重さ(g)					
1	0.42	1.45	0.22	0.3	片側	蛇紋岩	淡い黄緑色	100	
2	0.52	(2.01)	0.26	(0.9)	不明	蛇紋岩	深緑色と薄緑色の斑紋	不明	角が崩れ、片側破損
3	0.56	2.17	0.26	1.1	両側	蛇紋岩	淡い灰色と青緑色の斑 紋	100	
4	0.52	2.59	0.26	1.0	両側	蛇紋岩	淡い黄緑色	100	
5	0.49	1.51	0.21	0.7	両側	蛇紋岩	深緑色と薄緑色の斑紋	100	
6	0.46	2.09	0.20	0.8	両側	蛇紋岩	淡い黄緑色 薄緑色の斑駁	100	僅かに円錐台形狀
7	0.60	2.32	0.30	0.9	両側	蛇紋岩	淡い黄緑色	100	突き出しある。二重 の穿孔
8	0.51	(1.10)	0.18	(0.9)	両側	蛇紋岩	灰白色、淡い灰色の斑 紋	95	
9	0.52	(1.51)	0.25	(0.7)	不明	蛇紋岩	灰白色、深緑色の斑紋	不明	角が丸みを持つ
10	0.54	2.57	0.23	1.2	両側	蛇紋岩	灰白色、淡い灰色の斑 紋	100	太い穿孔
11	0.53	2.37	0.22	1.2	両側	蛇紋岩	淡い灰色	100	僅かに円錐台形狀
12	0.45	2.14	0.17	(0.7)	両側	蛇紋岩	深緑色、薄緑色の斑紋	85	
13	0.47	1.57	0.17	0.6	両側	蛇紋岩	淡い灰色、薄緑色の斑 紋	100	
14	0.50	2.34	0.23	(1.1)	両側	蛇紋岩	青色がかった濃い灰色 薄緑色の斑紋	90	
15	0.59	3.46	0.21	(2.0)	両側	蛇紋岩	深緑色、薄緑色の斑紋	75	
平均	0.51	2.22	0.23	0.9				96	

* 有効数字は、長さでは少數第2位まで、重さでは少數第1位までとした。

* 測定番号は、出土レベルの高所のものから付けた。

* 表中の（ ）は、破壊している遺物の現存部を示している。

* 平均値は、現存しているものの数値から算出した。外径・孔深の数値は、最大値の性である。

(3) C地点出土管玉（8点）(第13図)

本地点から出土した管玉は、B10m区とB10m10区、粘土層中央部のやや西寄りの南壁付近の床面から集中して出土している。本地点から、北東へ18.6cm隔ててA地点が、東へ6.7cm隔ててB地点が検出され、北西へ72.5cm隔てて短剣が出土している。これら8点の管玉は、No4・5・6・7が、長径5.8cm×短径3.2cmの橢円形状の範囲に、一部に重なりをもって出土している。その南側1.8cm

にはNo1・2・3が出土している。また、No8だけは単独で出土している(第11図)。

これら管玉の形状(表4)は、ほぼ中央部に穿孔された円筒形状を呈し、平均値で、外径0.45cm、長さ1.79cm、重さ0.7gである。No3は、全体の中で外径が最小であり、色調的には濃い褐色を呈している。また、No2やNo7のように破損した部分を、二次加工した痕跡を残すものも含まれている。No7は、全体の中で最短である。

色調からみると、No3を除いて他は、深緑色か濃い灰色を基調とした中に、黄緑色の斑紋を持つている。

表4 管玉観察表(C地点)

回番号	計測値			穿孔	材質	色調	遺存度(%)	備考
	外径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)					
1	0.44	2.31	0.18	0.8	両側	蛇紋岩	深緑色と薄緑色の斑紋	100
2	0.50	1.73	0.22	0.7	両側	蛇紋岩	濃い灰色	100
3	0.35	1.42	0.16	0.3	両側	蛇紋岩	淡い褐色、乳白色の斑紋	100
4	0.43	1.98	0.17	0.7	両側	蛇紋岩	濃い灰色、乳白色の斑紋	100
5	0.45	1.94	0.19	0.7	両側	蛇紋岩	濃い灰色、薄緑色の斑紋	100
6	0.52	2.27	0.19	1.0	両側	蛇紋岩	深緑色、乳白色の斑紋	100
7	0.47	0.86	0.22	0.4	片面	蛇紋岩	濃い灰色、薄緑色の斑紋	100
8	0.47	1.79	0.22	0.7	両面	蛇紋岩	濃い灰色、薄緑色の斑紋	100
平均	0.45	1.79	0.19	0.7				100

* 有効数字は、長さでは少数第2位まで、重さでは少数第1位までとした。

* 回番号は、出土レベルの高所のものから付けた。

* 平均値は、完存しているものの数値から算出した。外径・孔径の数値は、最大径の値である。

(4) D地点山上管玉(18点)(第13図)

本地点は、管玉を最も多数出土した地点であり、Bloms区とBloms区、粘土層西部のほぼ中央の床面から、長径13.3cm×短径9.4cmの橢円形状の範囲内に、一部3段の重なりを持ってNo1~11, 14~17が出土している。その北西側へ、3.5cmを隔ててNo12・13が出土し、No18は、南西へ6.7cm隔たった大刀の下から刀身に銛着して出土している。これら18点の管玉は、大刀と剣の柄が重なり合って出土している付近に置かれた状態である。また、西へ22.6cmほど隔てて鉄鎌が出土している(第11図)。

これらの管玉(表5)は、ほぼ中央部に穿孔された円筒形を呈し、平均値で、外径0.53cm、長さ2.26cm、重さ1.1gである。本地点の管玉は、平均値で他の地点の管玉に比較して0.12cm程長い。特に、No5は、3.73cmと最も長く、外径は0.49cmと細身であり、色調は深緑色で、一部に斑紋を持つ蛇紋岩である。No5と同様の色調・材質のものは、No3・9・10・11・12・17の7点である。他のNo1・2・4・7・8・15・16は、濃い灰色を基調とした斑紋をもつ蛇紋岩である。No6・13・14は、薄緑色系の色彩(斑紋なし)を持つ流紋岩である。No6は、全体の中では一番目に太い外径をもっている。No18については、大刀の赤褐色の酸化鉄に覆われていて詳細は不明である。

表5 管玉觀察表 (D地点)

同番号	計測値				穿孔	材質	色調	遺存度 (%)	備考
	外径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重さ(g)					
1	0.55	2.42	0.20	1.3	両側	蛇紋岩	青い灰色、乳白色の斑紋	100	僅かに円錐台形状
2	0.51	2.92	0.22	1.3	両側	蛇紋岩	青い灰色、乳白色の斑紋	100	
3	0.52	1.09	0.19	(0.5)	両側	蛇紋岩	深緑色、青緑色の斑紋	95	
4	0.57	2.35	0.20	1.2	両側	蛇紋岩	青い灰色の上に灰白色の斑紋	100	
5	0.49	3.73	0.21	1.6	両側	蛇紋岩	深緑色、全体に灰白色の花状	100	
6	0.64	2.15	0.28	1.5	両側	流紋岩	薄緑色	100	最長
7	0.52	2.68	0.20	1.3	両側	蛇紋岩	青味がかった青い灰色	100	
8	0.50	2.77	0.21	1.3	両側	蛇紋岩	青い灰色、薄緑色の斑紋	100	
9	0.56	2.96	0.19	1.6	両側	蛇紋岩	深緑色、薄緑色の斑紋	100	小口が端部に近い
10	0.51	2.25	0.21	1.1	両側	蛇紋岩	青い灰色が3/4 青い灰色	100	
11	0.53	2.12	0.23	1.0	両側	蛇紋岩	青い青緑色が3/4 灰白色	100	小口端部は磨耗
12	0.54	1.91	0.27	0.9	両側	蛇紋岩	青い青緑色が3/4 灰白色の斑紋	100	
13	0.42	0.91	0.19	0.1	両側	流紋岩	緑がかった灰白色	100	最も鮮やか
14	0.44	1.10	0.23	0.3	両側	流紋岩	緑がかった灰白色	100	
15	0.51	2.49	0.17	1.1	両側	蛇紋岩	青い灰色、薄い緑色の 斑紋1/5	100	
16	0.55	2.10	0.19	(1.1)	両側	蛇紋岩	青い灰色	95	
17	0.58	2.55	0.17	1.6	両側	蛇紋岩	灰白色	100	小口が横円
18	不明	2.12	不明	不明	両側	蛇紋岩	不明	不明	刀身に鈎着
平均	0.53	2.26	0.21	1.1				99	

※ 有効数字は、長さでは少数第2位まで、重さでは少数第1位までとした。

※ 同番号は、出土レベルの高所のものから付けた。

※ 裏中の()は、鍛造している遺物の現存値を示している。

※ 平均値は、元存しているものの数値から算出した。外径・孔径の数値は、最大径の値である。

2. 大刀 (1口) (第14図)

大刀は、Blismal区、粘土層内西端部の南壁近くの床面から、^鋒を西側に刃を北側に向かって出土している。茎部には、柄の木質の一部が遺存しその上層には、劍が鉋を東側にして出土している。^茎部には、柄の木質の一部が遺存しその上層には、劍が鉋を東側にして出土している。^茎大刀の^茎近くの刃部に、管玉1点(D地点・No.18)が鈎着し、北側へ3.6cmほど離れた地点からは、管玉17点が置かれた状態で出土している。また、北側へ5.5cmほど離れた地点からは、鐵鎗が3点出土している。

本大刀の造りは、半造りの直刀で、柄は角棒である。鉋は刀剣家が一般にいうところの「フクラ」が付き、闇の部分は、銹が激しく不明瞭であるが、棟闇は無く、刃闇は刃部からほぼ120°で0.7cmの長さをもって茎に至っているものと思われる。茎中央付近には、直径5mmの目釘穴が1個認められる。

刀装具は、出土しなかった。

表6 大刀觀察表

(単位: cm)

全長	刀身長	反り	身幅	刀身重ね	闇幅	茎長	茎幅	茎重ね
81.5	65.0	内反り気味	先幅 2.3 元幅 3.1	0.85	0.5 株無し	16.7	先幅 2.6 元幅 2.1	0.45

3. 剣・短剣(各1口)(第14図)

(1) 剣

本剣は、Bloms区とBloms区の粘土層内西端部南壁近くから出土している。その下層から、大刀が、鋒を西側にした状態で出土している。柄等、木質の遺存は認められない。

造りは、剣形で偏平な形状で反りは無く、中央部に彫みをもっている。鋒は、「フクラ」が付き、関は、両側で刃部からほぼ 150° で、2.2cm長さをもって茎部に至っている。茎も偏平で、中央部に僅かなくびれがある。茎尻は、錆化が激しく、茎の長さは定かでない。目釘穴は、X線撮影の結果を見ると二つ存在する可能性がある。

表7 剣観察表

(単位: cm)

全長	刀身長	刀身幅	関幅	茎長	茎幅	
(28.3)	24.3	先幅 2.8 元幅 3.2	刃 2.2	(4.1)	先幅 2.1 元幅 2.1	()内は現存部の長さ

(2) 短剣(1口)(第15図)

本剣は、Bloms区の粘土層内中央部西側に、南壁と直角に鋒を向けて床面から出土している。遺存状態は良好で木質が茎部に残り、関を覆っていることが確認できた。南へ6.7cm隔てて、刀子・鎌が本短剣に直交するように出土しており、南東へ72.5cm隔てて管玉のC地点が、東へ88.2cm隔てて管玉のA地点が、南東へ92.3cm隔てて管玉のB地点が検出されている。

造りは、剣形で反りは無く中央部に鉋を持ち、鋒に向って刀身の幅が狭くなっている。鋒は、「フクラ」が付いている。また、関は羽関で、刃部からほぼ 145° の角度で1.2cmの長さを持って茎に至っている。茎は、同一幅で造られている。目釘穴は、認められない。

床に接していた面全体から、布目痕が明確に確認できる。

表8 短剣観察表

(単位: cm)

全長	刀身長	刀身幅	関幅	茎長	茎幅	
17.6	11.5	先幅 1.8 元幅 2.2	刃 0.65	6.1	先幅 1.2 元幅 1.2	

4. 鉄鎌(3点)(第15図)

鉄鎌は、Bloms区の粘土層内西部床面に、重なり合って出土している。南へ5.5cm隔てて、大刀と剣が出土している。また、東へ24.7cm隔てて管玉のD地点がある。これら3点の鉄鎌は、No.3が最上位で、No.1・2の順で重なり合って出土しているが、No.3は、三つに折れて出土している。形状は、3点とも同一で比較的良好な状態で原形を保っている。鎌身部は、広鋒で柳葉式の形状を明確に表し、No.1の鎌部には、孔が一つ確認できる。鎌身部の中央部は、僅かにくびれを持ち関へ至る。関は、両側で、茎部から直線的に刃部へ至っている。茎は、角が丸味のある四角形で、茎尻に至

るに従い細くなる。また、茎には木質が遺存し、その上を木皮により口巻が堅固にされている。

表9 鉄鉈觀察表

(単位: cm)

図番号	全長	鉄身長	鐵身幅	闊幅	茎長	口巻範囲	鉄身重	備考
1	8.2	5.3	先幅2.0 中幅1.9 元幅2.2	0.6	2.9	0.8	0.5	完形
2	7.9	5.2	先幅2.2 中幅2.1 元幅2.2	0.5	2.7	1.0	0.5	一部 破損
3	(8.7)	(5.9)	先幅2.2 中幅(2.1) 元幅2.3	0.6	2.4	0.8	0.5	破損

() 内は、現存部の長さ

5. 刀子・鉈

(1) 刀子 (1点) (第15図)

出土位置は、Blisms区の粘土塚内中央部やや西寄りに出土しており、北へ6.7cm離れて短剣が出土している。本刀子の南側には、鉈が並行に置かれた状態で出土している。出土状況は、刃部を上に鋒を東側に向けて、鉈と銹着した状態で出土している。

形状は、刀身が薄手で銹化が進んでいるが、鉢等は原形を良好に保っている。茎部には、木質が遺存している。本刀子は反りは無く、棹は直線で、棹闊は無く茎に至り、刃闊は刀部端から外側気味に茎部にいたる。茎は、同一幅で茎尻は丸味をもつていて、床に接していた面には、一部布目痕が確認できる。

表10 刀子觀察表

(単位: cm)

全長	刀身長	反り	刀身幅	刀闊幅	茎長	茎幅
8.3	6.5	無し	先幅 0.9 元幅 1.0	0.3	1.8	先幅 0.7 元幅 0.6

(2) 鉈 (1点) (第15図)

出土位置は、Blisms区の粘土塚内中央部やや西寄りに出土しており、北へ4.2cm離れて短剣が出土している。本鉈は、北側に並行に置かれた刀子と銹着して出土している。木部が茎尻より鋒に向かって10.1cmに渡って遺存しており、特に、床面側には肉厚に残っていた。鋒も、折れてはいたものの原形を良好に保っていた。

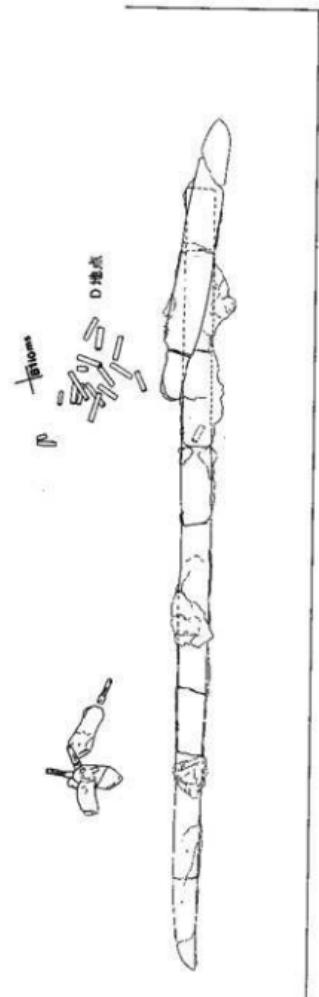
刃部の形状は、両刃で断面形が二等辺三角形を呈し、鋒になるに従って身幅が細くなり、鋒は鋭く尖る。裏側は、「V字状」に彫られている。また、刃部は、茎部の先を基点として18.5°の反りを持っている。本鉈の上面全体には、布目痕が確認できる。

表11 鉈觀察表

(単位: cm)

全長	刃部長	刃部幅	茎長	刃部の反り
12.6	2.5	1.0	10.1	18.5°

刃部幅は、最大値



A地点



B地点

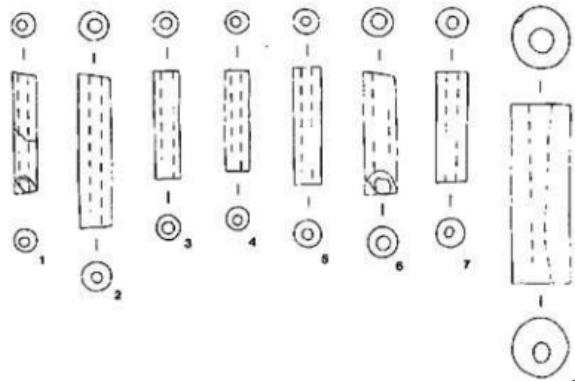


C地点

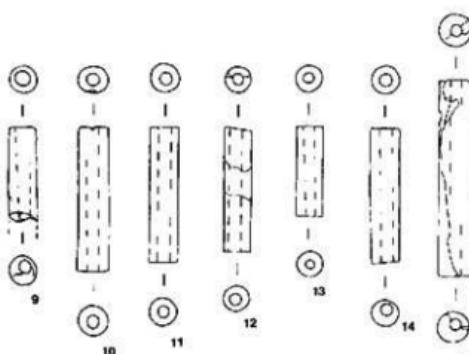
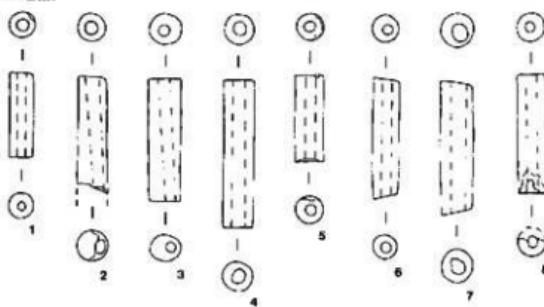


第11图 埋葬坑内遗物出土状况图

A地点



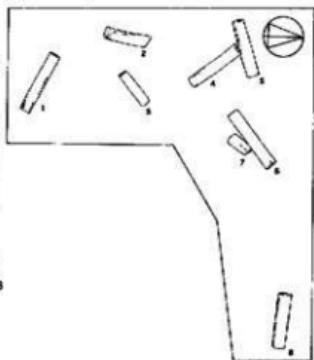
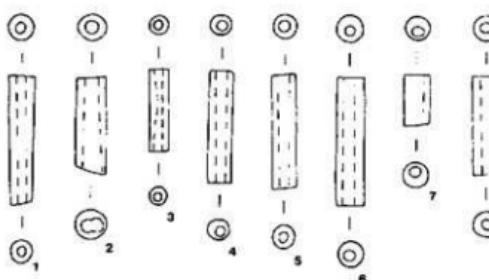
B地点



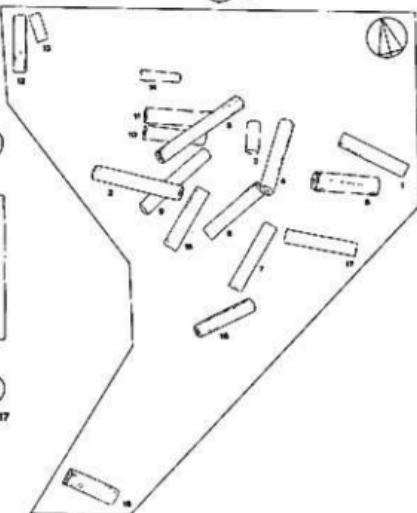
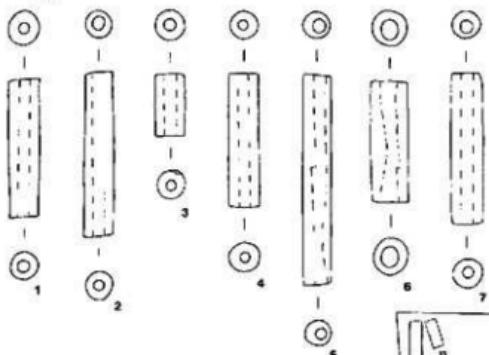
S=1/1

第12図 管玉実測図 (A・B地点)

C地点

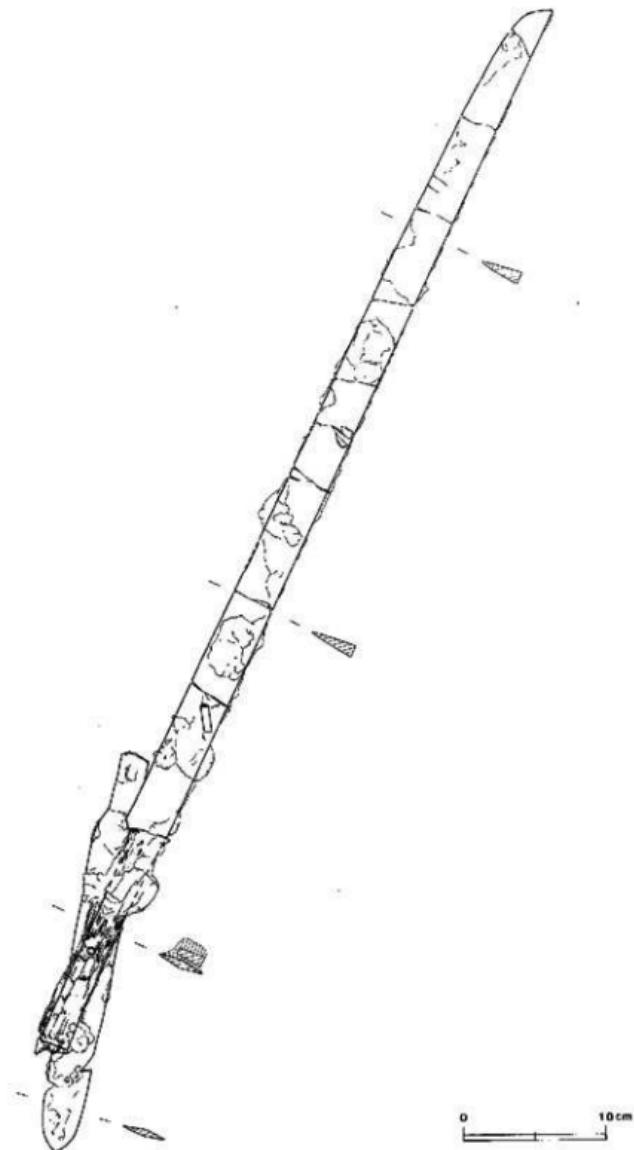


D地点

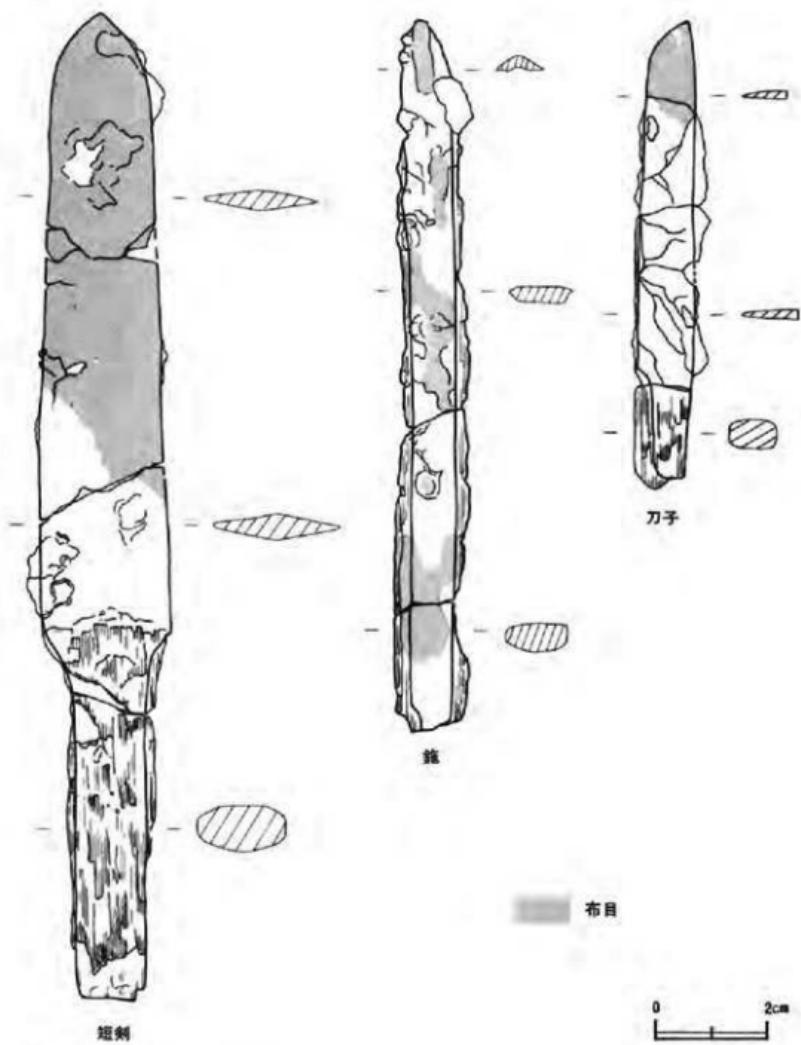


S = 1 / 1

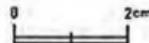
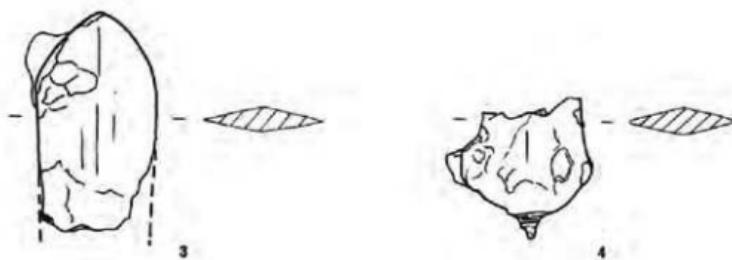
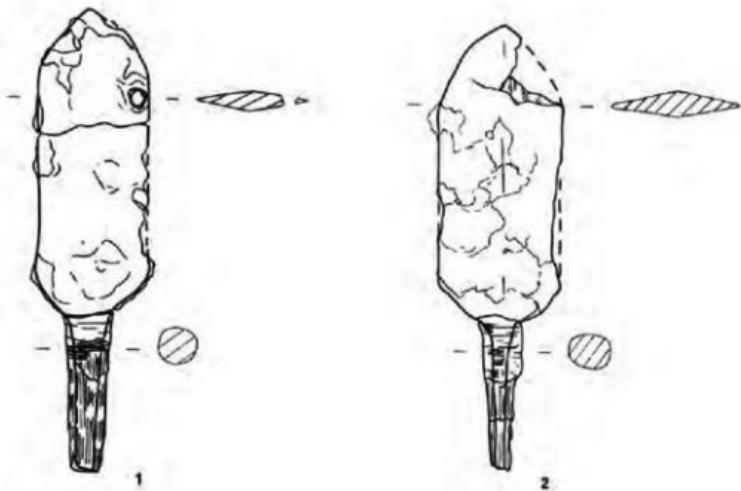
第13図 管玉実測図 (C・D地点)



第14図 大刀・剣実測図



第15図 短劍・鎗・刀子実測図



第16図 鉄鉱実測図

第5節 その他の出土遺物

1. 縄文式土器・弥生式土器・土師器片について（第18図）

縄文、弥生、上部器等の破片は、本古墳の調査中の各トレンチ内や埋葬施設の覆土等から出土したものである。

(1) 縄文式土器（6片）

図版No.6～11までは、縄文式土器の深鉢胴部片である。縄文時代早期の出戸下層式に比定され、平行の大沈線・細沈線で文様構成が施されている。図版No.8の内面は、横ナデされ、図版No.9の外面には、磨きの痕がみられる。

(2) 弥生式土器（6片）

埋葬施設の覆土内から、図版No.2～5が出土している。摩耗が著しいが、いずれも、弥生式土器の胴部で、付加条（付加2条）の縄文が施され、No.2については、結節が観られる。胎土は、砂粒を多く含み、石英、長石粒も頗著で粗い。図版No.12・13は、トレンチ内からの出土であるが、同様の弥生式土器である。

(3) 土師器（1片）

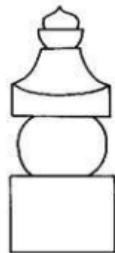
図版No.14は、前方部に当たる第4号トレンチから出土したものである。土師器壺の胴部片で、ハケ目が施され炭化物の付着がみられる。本古墳の時期と、同時期に比定されるものと思われる。

2. 五輪塔・擂鉢

(1) 五輪塔（第17・19・20図）

五輪塔は、本古墳後円部の東側B2i区とB2ii区から2基分が出土している。その下層からは、人骨と思われる骨が埋納された擂鉢が出土している。本地点からは、五輪塔の空風輪（2）、火輪（2）、水輪（2）、地輪（2）が出土している（表12）。No.1・2・4・7で、1基を構成するものと思われるが、火輪は比較的原形を留めているものの、他は、風化・破損がひどく、特に、その状況はNo.7が著しい。No.7は、空輪を損失しているが、その痕跡を、風輪上に認められる。もう1基の五輪塔（No.3・5・6・8）は、出土位置にまとまりがあり、地輪を除いて原形をよく留めている。2基の五輪塔とも、形式は同一のもので小形である。空風輪は一体となっていて、No.5の空輪は擬宝珠状で、風輪との境に深さ2cm程の刻みがある。火輪の軒反りは小さく、軒端面は垂直に近い。火輪の上面は、平坦で空風輪を受ける柄穴等は設けられていない。水輪については、上部幅が幾分せばまる円錐台形状を呈している。地輪は、一边が25～26cm程の正方形に近い面をもっているが、角の風化や破損が激しい。材質は、花崗岩である。

また、その周辺からは、五輪塔に伴うと思われる瓦片が7点出土している。



宝珠
受花
笠石
塔身

梵字	五輪塔				
五大	空輪	風輪	火輪	水輪	地輪
形式	圓	半月	三角	円	方
読み	キャ	カ	ラ	バ	ア
字義	虛空	因業	魔垢	言説	不生
五氣	土用	冬	夏	秋	春

五輪塔各部名称と意味

表12 五輪塔観察表

団番号	器種	法 益(cm)				石質	備考
		最大長	最大幅	最大厚	重さ(kg)		
第19回 1	五輪塔(地輪)	26.8	26.8	18.5	20.8	花崗岩	*
2	五輪塔(火輪)	31.5	30.8	14.8	20.5	花崗岩	補修痕有り*
3	五輪塔(水輪)	25.2	23.6	15.6	14.6	花崗岩	※
4	五輪塔(風輪)	23.5	16.1	13.3	6.6	花崗岩	*
第20回 5	五輪塔(空風輪)	16.7	16.1	21.1	8.0	花崗岩	※
6	五輪塔(火輪)	32.2	30.9	15.9	23.4	花崗岩	※
7	五輪塔(風輪)	20.3	12.3	12.9	3.9	花崗岩	補修痕有り*
8	五輪塔(地輪)	26.8	25.1	16.9	17.2	花崗岩	※

*・※は、同一個体

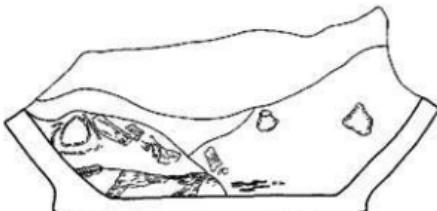
表13 石觀察表

団番号	器種	法 益(cm)				石質	備考
		最大長	最大幅	最大厚	重さ(kg)		
第21回 1	石片	25.4	18.9	2.4	1.07	砂岩	五輪塔出土位置
2	石片	47.6	35.5	5.2	12.90	砂岩	五輪塔出土位置
3	石片	22.7	9.3	2.7	0.66	砂岩	五輪塔出土位置
4	石片	33.1	18.1	5.8	4.90	砂岩	五輪塔出土位置
5	石片	15.6	10.2	3.3	0.64	砂岩	五輪塔出土位置
6	石片	25.5	18.5	6.7	3.30	砂岩	五輪塔出土位置
第22回 7	石核	9.9	8.2	5.6	0.59	粘板岩	表揮
8	石片	16.0	9.4	2.5	0.39	砂岩	五輪塔出土位置

(2) 摂鉢 (第17・18回)

後円部東斜面中央部付近(B2i:区), 標高20.38mの位置から出土している。その上層からは, 五輪塔が2基出土している。器形は, 体部が外傾し, やや外反りしながら立ち上がり, 口縁部で僅かに内傾し口唇部に至り, 口縁部に片口を持っている。計測値は, 口径35.2cm, 器高13.1cm, 底径16.6cmを測る。外面は, 赤褐色を呈し, 口唇部をヘラナデにより整えている。片口には, 整形時の歪みが残っている。また, 口縁部は横ナデされ, 体部は斜めにハケ目を施している。内面は, 横ナデされ, 段部3分の1程には輪積み痕が認められる。

本摂鉢は, 藏骨器として使用され, 器内には, 炭と火葬された思われる骨片が納められていた。特に, 副葬品は出土せず, 骨片の量も少なかった。底部に意図的に穿孔した梢円状(長径4.8cm×短径2.2cm)の孔が確認され, その孔は器外からの穿孔で周囲を丁寧に削っている。口縁部内面の片口付近には, 「U」形のヘラ記号と思われるものが記されている。焼成は, 良好で焼き締まっている。



3. 古銭

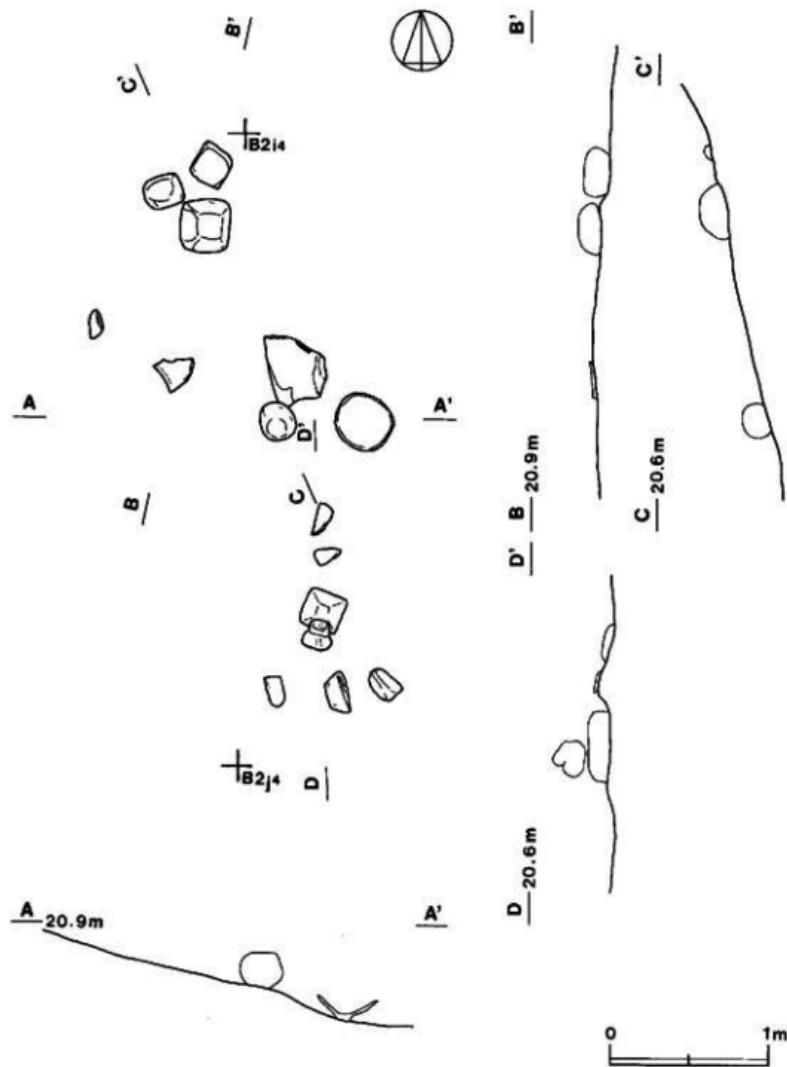
No.4の「文久永寶」は, 第4号トレンチ北端から出土したが, その他は, 後円部の盛土を中心にして出土しており, これらの古銭は墳頂部に祀られていた祠に奉納されたものであろうと推定できる。

種別としては, 前述の「文久永寶」1点と不明の1点を除いては, 全て「寛永通寶」である。「文久永寶」は, 銀化が激しいが裏面に波紋の刻みが確認できた。「寛永通寶」については, No.1のように, 裏面に「丈」の字が有り, 銀化もなく刻みもしっかりしたものや, 3枚が重なり合って銀化の激しいものが出土している。

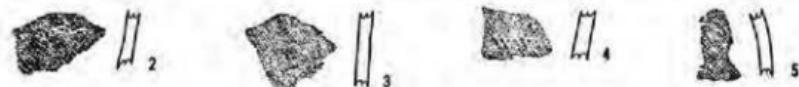
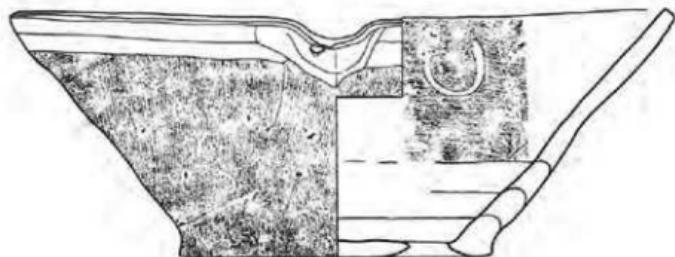
表14 古銭観察表

回番号	銭名	裏面	直径(cm)	出土位置	回番号	銭名	裏面	直径(cm)	出土位置
第23回 1	寛永通寶	「丈」の字	2.53	墳頂部	第23回 6	寛永通寶	無紋	2.36	表探
2	寛永通寶	無紋	2.35	第5号トレンチ	7	寛永通寶	無紋	2.45	表探
3	寛永通寶	無紋	2.39	第5号トレンチ	8	寛永通寶	無紋	2.30	表探
4	文久永寶	波紋	(2.50)	第4号トレンチ 底部	9	寛永通寶	無紋	(2.36)	表探
5	寛永通寶	無紋	2.30	墳頂部第1号 トレンチ	10	不明	不明	(2.35)	表探

()は, 推定値



第17図 五輪塔・鐘鉢出土状況図



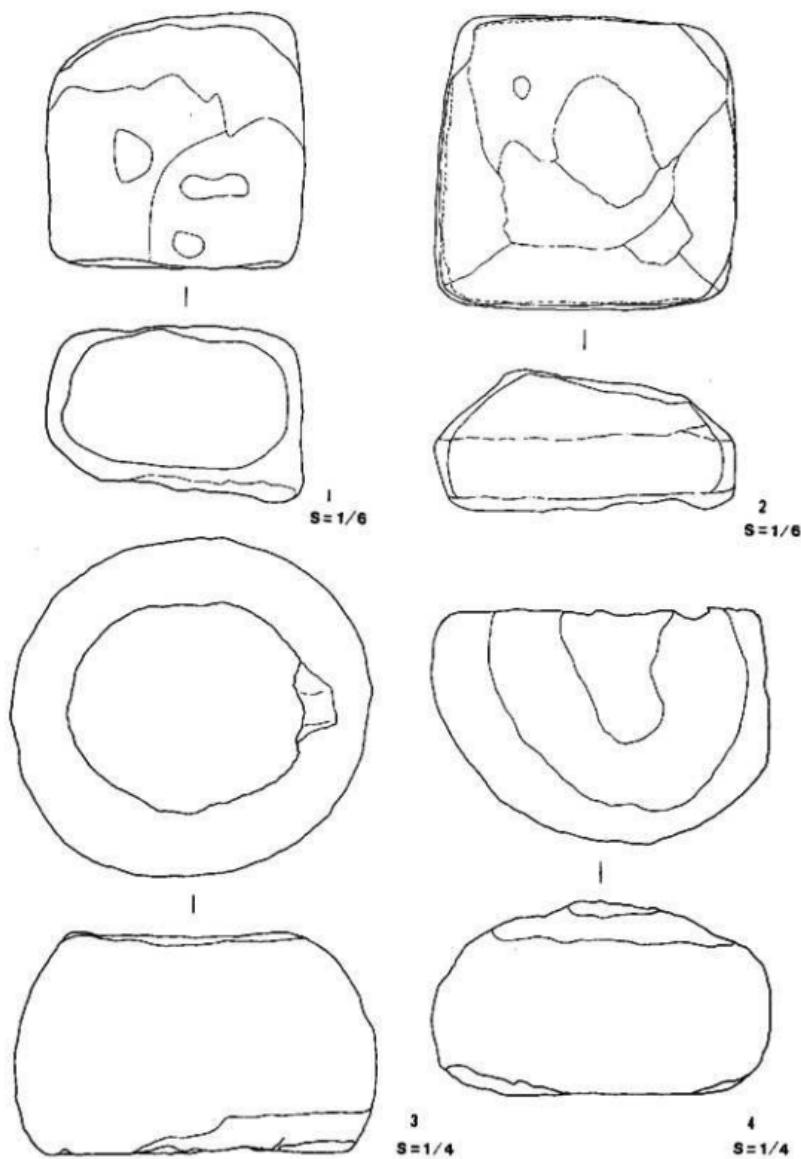
埋葬施設内覆土



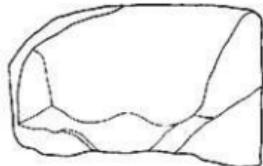
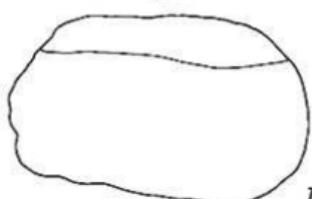
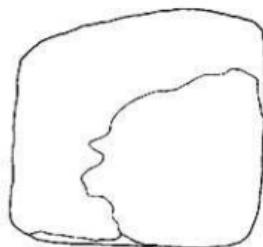
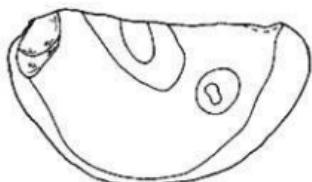
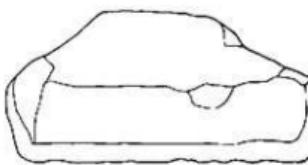
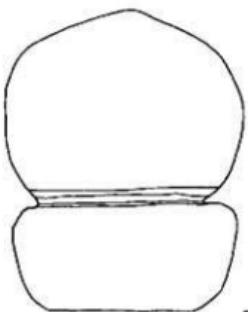
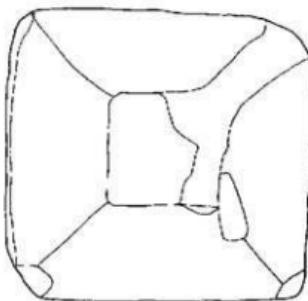
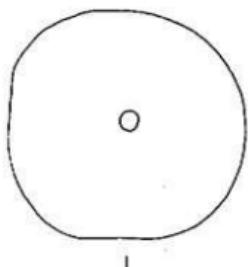
トレンチ内



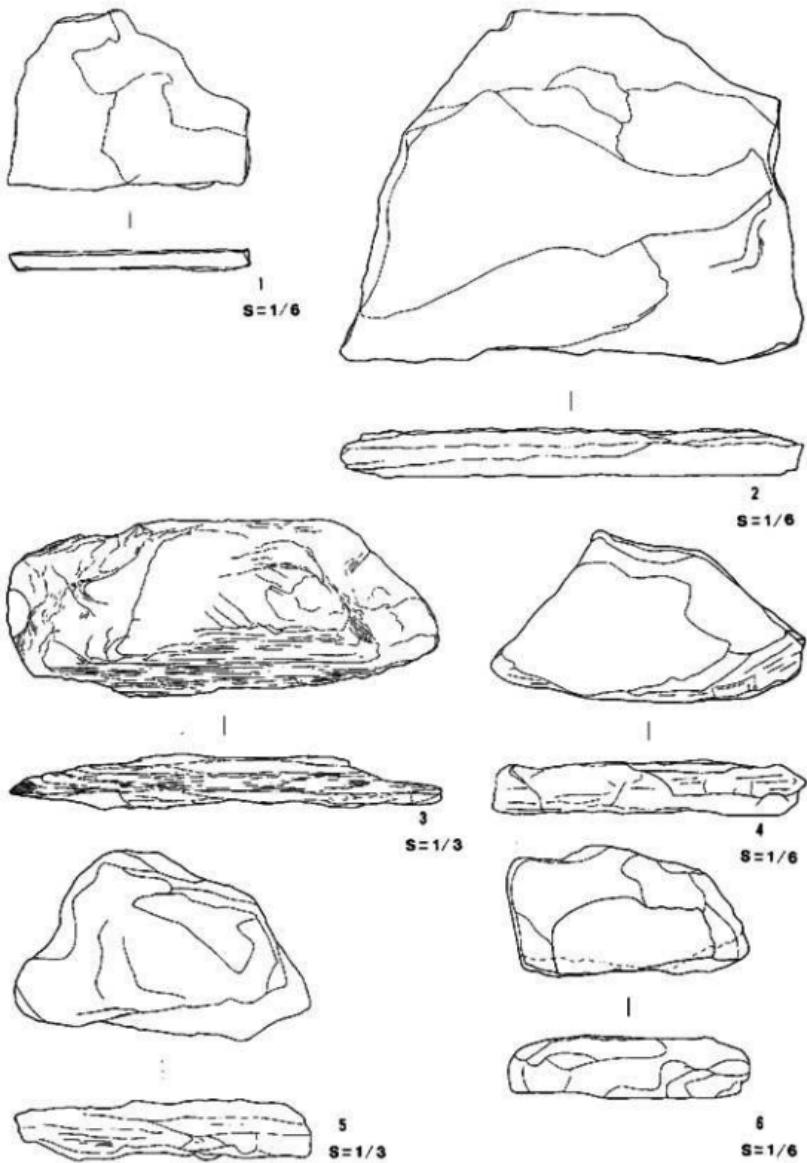
第10図 横鉢実測図・出土土器拓影図



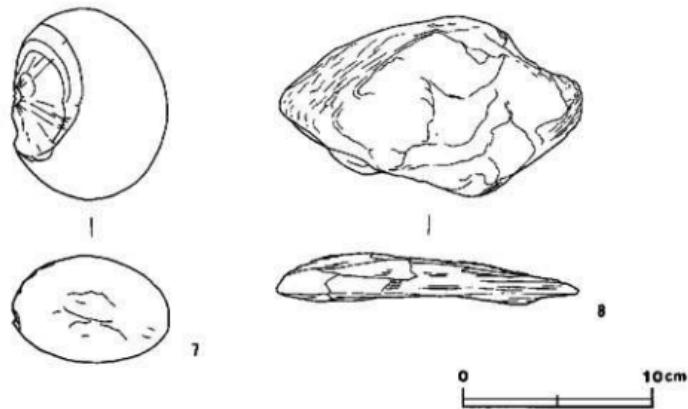
第19図 五輪塔実測図(1)



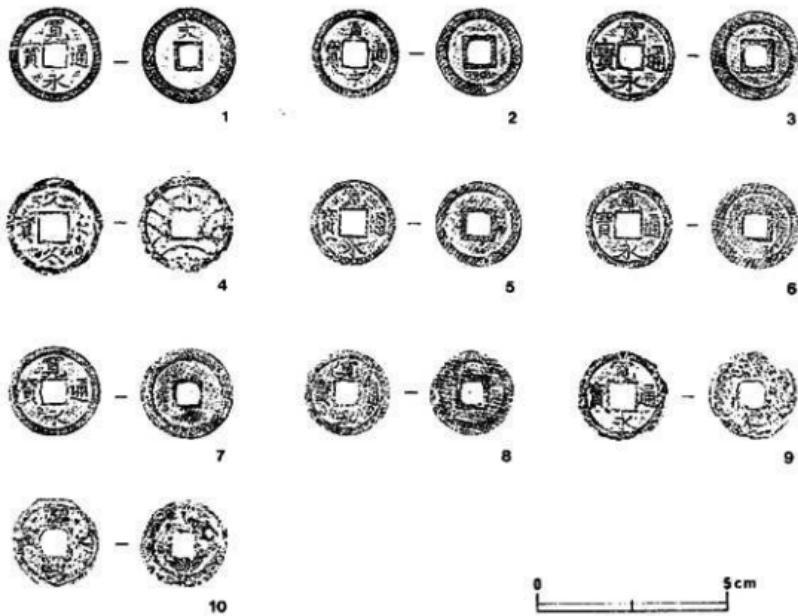
第20図 五輪塔実測図(2)



第21図 石実測図(1)



第22図 石実測図(2)



第23図 古錢拓影図

第4章 考察

第1節 墳丘及び埋葬施設

本古墳は、稲敷台地南端に位置する独立丘に有り、南側に広がる沖積平野に東面している。自然丘上に構築されている本古墳は、主軸方向N-76.4°-Wで、全長71.2m、後円部直径38.8mの規模を持っている。水田との比高は18mで、遠望すると実際より大きく見え、かなり壮大な観がある。その姿は、被葬者の権力を示すのに十分なものであったと推測される。

本古墳を、県内の類例(表15)と比較すると、まず、立地は、玉造町の勅使塚古墳⁽¹⁾、桜川村の原1号墳⁽²⁾、つくば市の山木古墳⁽³⁾等と同様に、台地縁辺部や、自然丘の尾根を利用して構築されている。

規模的には、大洗町の鏡塚古墳には及ばないものの、山木古墳⁽⁴⁾等よりは大きく前期古墳の中では大形の部類に入るものと思われる。

本古墳の埋葬施設は、盛土されている後円部墳頂下、1.5mに検出され、上端は東西11.0m、南北3.3mの長方形を呈し、深さ0.45m程の掘り方の中に、外法で8.3m×1.3mの長大な粘土櫛を有している。粘土櫛は、粘土層の地山を平坦に整形し、その上に木棺を埋納し、その上部を粘土で被覆したと思われる状態で検出されている。内部は、船底状を呈し、壁面には、木質の圧痕が認められたことから、割竹形木棺が埋納されていたものと思われる。掘り方底部と粘土櫛を構築している粘土は、灰黄色の粘性の強い硬質の粘土であり、ケイ光X線による定性分析の結果、鉄分を多く含むより鉱物に近い状態の土であることが判明した。その為か、粘土櫛表面や、土層断面に橙色をした酸化鉄の層が確認された。また、上蓋部が櫛内に陥没した部分と床との間に、一見すると赤彩されたと思われる暗赤褐色の層が検出されたが、分析の結果は、鉄分含有率で高い値が出ただけであるため、粘土の中に含まれている鉄分が酸化した酸化鉄と有機質(木棺)の腐蝕物とからなる層であると考えられる。

本古墳は、粘土櫛の規模でみると、鏡塚古墳やつくば市の桜塚古墳等に比肩するものであり、墳丘や埋葬施設の構築状態等から考えると、前期古墳の様相を持つものと思われる。



表15 茨城県内の出現期古墳概況

新撰夷記については、極力、茨城県史料・各報告書に従った。

第2節 遺物

本古墳に伴うと思われる遺物は、大刀1口、剣1口、短剣1口、鉄鏃3点、刀子1点、鉈1点、管玉49点で、全て粘土構内より出土した。この遺物の組み合せは、武器と工具類、そして装身具である。これは、鏡こそないものの八郷町の丸山古墳、⁽⁴⁾ 桜川村の原1号墳、⁽⁵⁾ 岩瀬町の狐塚古墳の例のように前期古墳の特徴を示していると思われる。

本古墳の遺物は、二つのまとまりを持って出土している。まず一つは、粘土構の西部で、大刀・剣・鉄鏃・管玉が出土しており、この場所は、副葬品を埋納した所ではないかと思われる。もう一つは、粘土構の東部から中央部のやや西寄りの所で、遺物が出土した所は構に膨らみのある場所である。ここからは、短剣・刀子・鉈・管玉が出土しており、短剣が南北の壁と直行するように置かれ、管玉が粘土構の北壁側と南壁側に、対称的に出土している。その状況から、被葬者が埋葬されていた所と考えられる。また、その位置の東側からは、遺物は何も出土していない。

次に、本古墳出土の管玉(表16)の特徴についてみると、形状的には、外径で0.4cm以上0.6cm未満のものが93.7%を占めている。長さでは、1.5cm以上3.0cm未満が81.9%、孔径は、0.1cm以上0.3cm未満が98.0%と、そのほとんどを占めている。重さでも、0.5g以上1.5g未満が73.7%が集まっている。ほぼ、定型化している様子が窺える。表17で、他の古墳の平均値と比較してみると、山本古墳・勅使塚古墳・原1号古墳に比較して、本古墳のものは長めであり、外径では、山本古墳・原1号古墳出土のものより太く、勅使塚古墳出土のものより細いことが分かる。

材質的には、蛇紋岩・流紋岩・輝緑岩の三つに分けられ、色調的には、深緑色で斑紋を持つものと、濃い灰色で斑紋を持つもの、そして、薄黄緑色で斑紋を持たないものの三つのグループに分けることができ、勅使塚古墳・原1号古墳の例に近い。

出土数では、本古墳の数は、丸山1号墳の95点、桜塚古墳の50点に次ぐ49点である。(篠塚古墳からは、27点が出土している。)

表16 桜山古墳出土管玉統計表

No.	外径(cm)	割合(%)	長さ(cm)	割合(%)	孔径(cm)	割合(%)	重さ(g)	割合(%)
1	以上 外径 0.3~0.4	2.1 (1)	以上 長さ 0.8~1.0	4.5 (2)	以上 大きさ 0.1~0.2	47.9 (23)	以上 重さ 0.1~0.5	13.2 (5)
2	0.4~0.5	41.7 (20)	1.0~1.5	9.1 (4)	0.2~0.3	50.1 (24)	0.5~1.0	42.1 (16)
3	0.5~0.6	52.0 (25)	1.5~2.0	22.7 (10)	0.3~0.4	0 (0)	1.0~1.5	31.6 (12)
4	0.6~0.7	2.1 (1)	2.0~2.5	41.0 (18)	0.4~0.5	2.1 (1)	1.5~2.0	10.5 (4)
5	1.0~1.1	2.1 (1)	2.5~3.0	18.2 (8)			7.0~7.5	2.6 (1)
6			3.5~4.0	4.5 (2)				
平均	0.52	(48)	2.14	(44)	0.22	(48)	1.1	(38)

()内は、実数

表17 県内前期古墳出土管玉平均値表

(単位: cm)

寸法/古墳	板山古墳	山木古墳	勤使塚古墳	興塚古墳	原1号墳
長さ	2.14	1.42	1.64	大2.65 小0.9	1.13
外径	0.52	0.38	0.62	大0.7 細0.3	0.38
材質	蛇紋岩・流紋岩・輝緑岩	碧玉・滑石・鉛石英	蛇紋岩・滑石	碧玉・滑石	緑色凝灰質・頁岩

※ 山木古墳・勤使塚古墳の資料は、「茨城県筑波町山木古墳」より。興塚古墳は、「常陸興塚」、原1号古墳については、「茨城県史料」より抽出した。

※ 聖塚古墳の数値は、最大・最小値

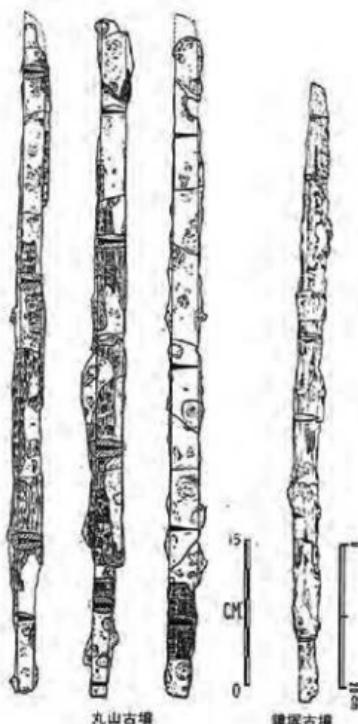
本古墳の大刀は、全長81.5cmの平造りの直刀である。本県の前期古墳で大刀が出土している例は、丸山1号墳、孤塚古墳、鏡塚古墳であるが、本古墳のものは、図版上の比較検討であるため詳細については不明な点が多いが、形状・長さ等から、丸山1号墳の出土例に近いと考えられる。

剣・短剣は、丸山1号墳、孤塚古墳、原1号墳、山木古墳、桜塚古墳等に例をみるとことができる。本古墳出土のものは、鋒に「フクラ」が付いていることや闇の様子等、丸山1号墳の例に近い。

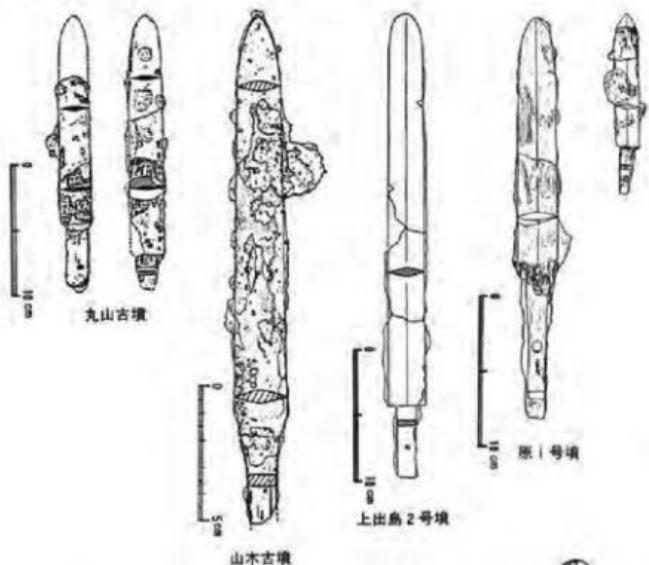
鉄鎌については、岩井市の上出島2号墳に例をみることができるが、本古墳出土のものとは形状が異なっている。その他、県内における類例は、今回の調査・整理において調べた範囲では該当例がなかった。県外の例としては、奈良県の桜井茶臼山古墳・櫛山古墳に同形の鉄鎌が出土している。また、本古墳出土の鉄鎌には、穿孔されたと思われる孔も認められており、この類例を検討していく必要があると考える。

刀子・鉈が組んで出土した例としては、鏡塚古墳、孤塚古墳に例をみるとことができる。鉈だけの出土は、原1号墳にその例がある。本古墳出土の鉈の全体的な形状は、原1号墳の例に近く、鋒の状態は、鏡塚古墳の例に酷似している。

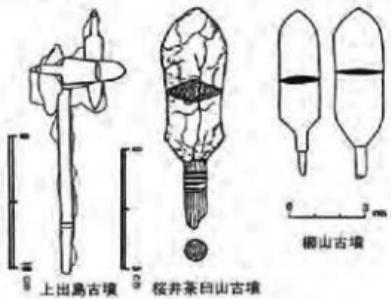
大刀



剣・短剣



鉄鎌



刀子



第3節　まとめ

墳丘・埋葬施設・出土遺物について、他の類例と比較しながら整理してきたが、最後に、調査・整理の段階で疑問と思われることを述べながら、本古墳の特徴をまとめておきたい。

本古墳は、標高23.3mの独立丘上に地山整形後、盛土によって構築されていること、埴輪を伴っていないこと等から、県内における前期古墳の類例に入る1基と思われる。出土遺物については、「霞ヶ浦周辺の前期古墳が、鉄製武器を中心となり得ない。」ということから考えると、本古墳は異例ではないかと思われる。

構築年代は、丸山古墳・原1号墳・桜塚古墳・山木古墳構築年代に近い時期になるのではないかと思う。しかし、他の古墳は、穿孔のある土師器等を出土しているが、本古墳からは、封土内から炭化材の付着した土師器の洞部片が1片出土したに過ぎず、不明な点も残る。

北側台地には、隣接して長峰遺跡がある。当遺跡には、弥生時代の住居跡51軒、古墳時代の住居跡68軒(前期52軒、中期16軒)、後期に入る古墳35基等が確認されている。これらのことから、この地域には、弥生～古墳時代前期を中心に集落が形成されていたことが窺える。長峰遺跡の報告書には、「弥生時代の住居跡の検出は、この時期から当地域に人々が移り住み生活が営まれたことを実証するものであり、51軒もの住居跡が検出されたのは県内においても希少なものである。古墳時代については、前期において住居跡の数が急増するのに対し、中期には減少の傾向がみられ、ついに後期に至っては集落形成がなされなくなる。後期になると、当遺跡内には古墳が築造されるようになり、従来の生活の場から一変し、墓域としての性格をもつ聖域として活用されたものと考えられる。」と、その変遷が把えられている。のことから、本古墳は、古墳時代前期に、長峰の台地に形成されていた集落と密接な結び付きをもつ古墳で、長峰古墳群においては初期の古墳であったと考えられる。また、その規模からも、長峰地区に留まることのない広範囲の地域を勢力下に治めていた人物の墓と思われる。

注 参考文献

- (1) 「茨城県史料 考古資料編 古墳時代」 茨城県史編さん委員会原稿古代史部会 1979年
- (2) (1)と同じ
- (3) 「茨城県筑波町山木古墳」 茨城考古学会 1972年
- (4) 大場 齐雄・佐野 大和 国学院大学考古学研究報告第一冊「常陸鏡原」 総合会 1956年
- (5) 昭和54～56年度文部省特定研究競争による調査研究概要「筑波古代地域史の研究」 筑波大学 1981年
- (6) 後藤 守・大塚 初重 「常陸丸山古墳」 山間書房 1957年
- (7) (1)と同じ
- (8) 茨城県岩井西高等学校建設に伴う調査報告「上出島古墳群」 茨城県岩井市教育委員会 1975年
- (9) 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第19冊「板井茶臼山古墳附御山古墳」 奈良県教育委員会 1961年
- (10) (9)と同じ
- (11) 茂木 雅博「須丘よりみた出現期古墳の研究」 雄山閣 1987年
- (12) 長崎崎ニータウン内埋蔵文化財報告書58「長峰遺跡」 茨城県教育財團 1990年

結語

桜山古墳の発掘調査は、平成元年1月に開始し、墳丘及び埋葬施設、遺物・副葬品の調査をして平成元年3月に終了した。

本古墳は、前方部を中心約2分の1近くが毀滅していたものの、後円部から前方部の北側にかけては、当時の姿を良好に残していた。また、埋葬施設は長大な粘土構で、副葬品類についても武器・工具類・装身具を備え、それらの遺物は形状をよく伝えていた。本古墳は、前期古墳に比定されている八郷町の丸山古墳、桜川村の原1号墳やつくば市の桜塚古墳・山木古墳に近い時期の前方後円墳であることが明らかになった。

この桜山古墳の調査によって得た数々の資料は、龍ヶ崎市の歴史はもとより、古代の常陸の歴史を解明する上で、重要な位置を占めていると思う。前期古墳の発掘調査例は、県内でもまだ数が少なく、従って、今回の調査により知り得た事実については、極力客観的に記録するよう努めた。しかし、時間的な制約の中で、他の類例との比較検討も十分とは言えず、深く掘り下げる考察を加えられなかつた面も多い。

最後に、本報告書をまとめるにあたり、龍ヶ崎市教育委員会をはじめ、関係各位のご指導・ご協力に対し、文末ではあるが深く感謝の意を表す次第である。

写 真 図 版





桜山古墳周辺鳥瞰



調査前全景



墳頂部

PL2



埋葬施設掘り方プラン



埋葬施設土層断面



埋葬施設(被覆粘土の状態、東より)



埋葬施設(内部除去後、西より)

PL4



埋葬施設
土層断面B



埋葬施設土層断面C



埋葬施設土層断面A 東部



埋葬施設土層断面C 北部



第1号トレンチ土層断面



第2号トレンチ土層断面



第3号トレンチ土層断面

PL6



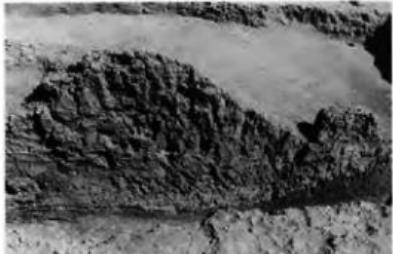
第4号トレンチ
土層断面



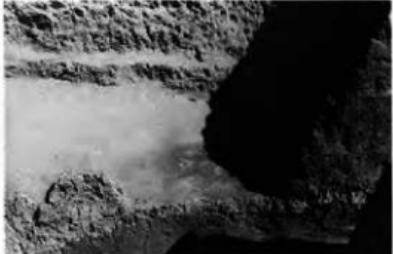
第5号トレンチ土層断面
(南側)



第5号トレンチ土層断面
(北側)



東小口土層断面



東小口土層断面



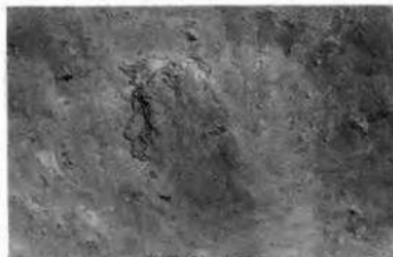
西小口土層断面



前方部東端土層断面



粘土帯北壁断面



炭化材出土状況



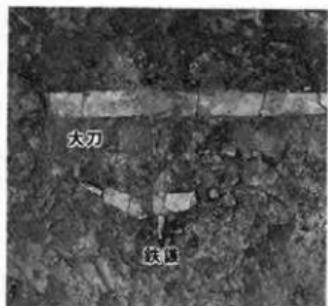
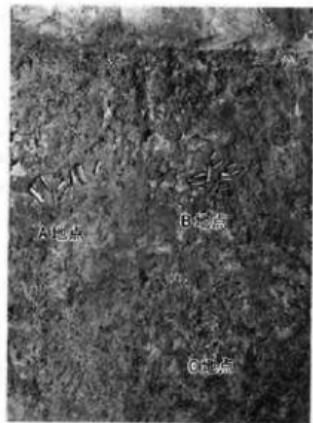
第1号トレンチ西端部



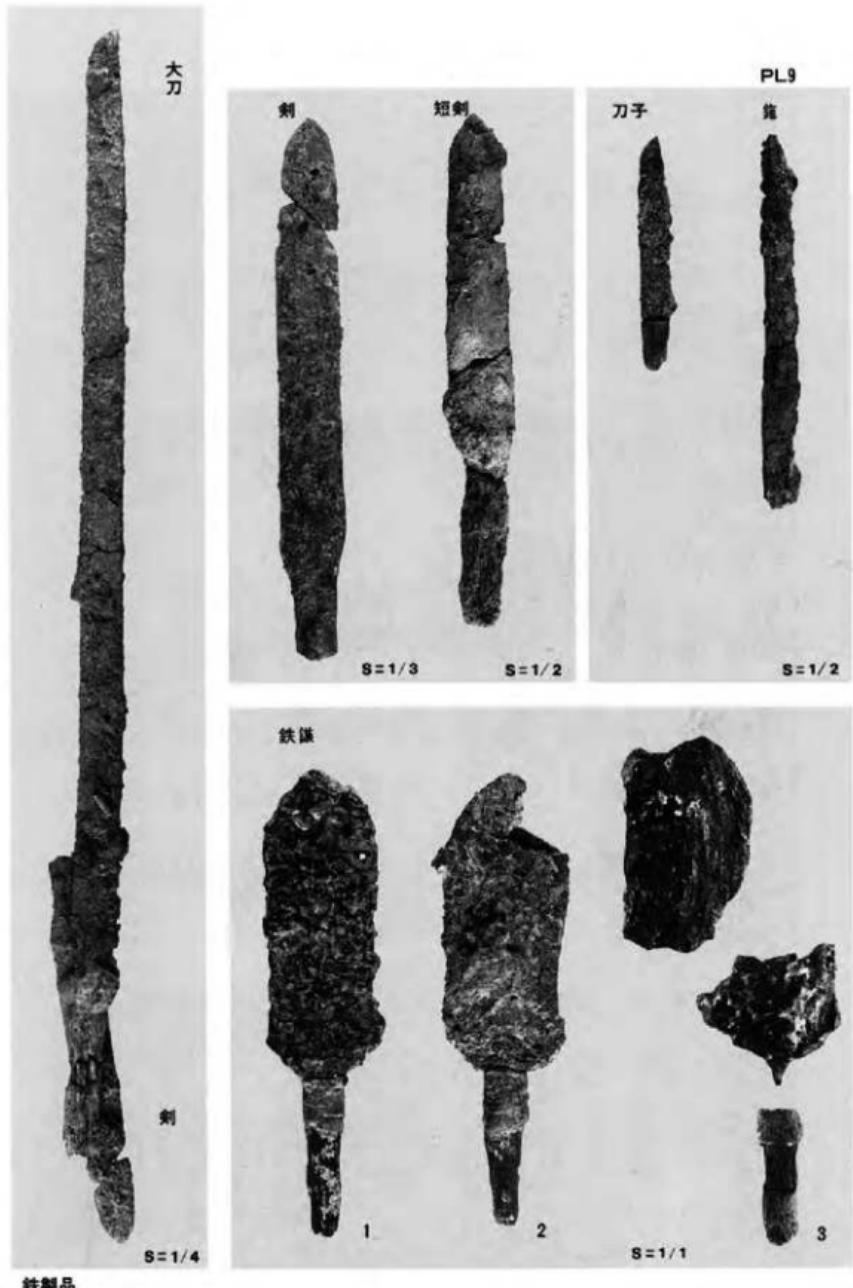
第4号トレンチ北端部

PL8

管玉



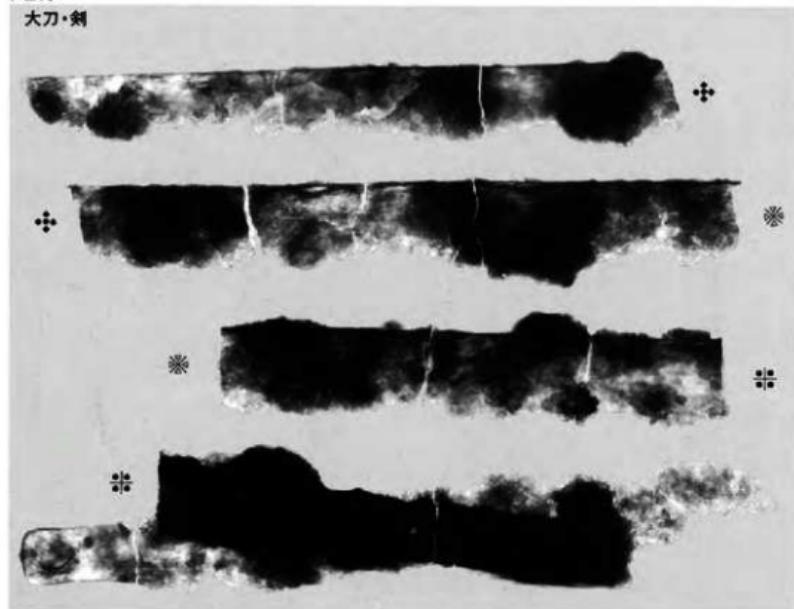
遗物出土状况(粘土块内)



铁制品

PL10

大刀·劍



短劍



鐵鎚



刀子·筆



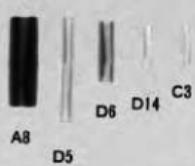
布目痕



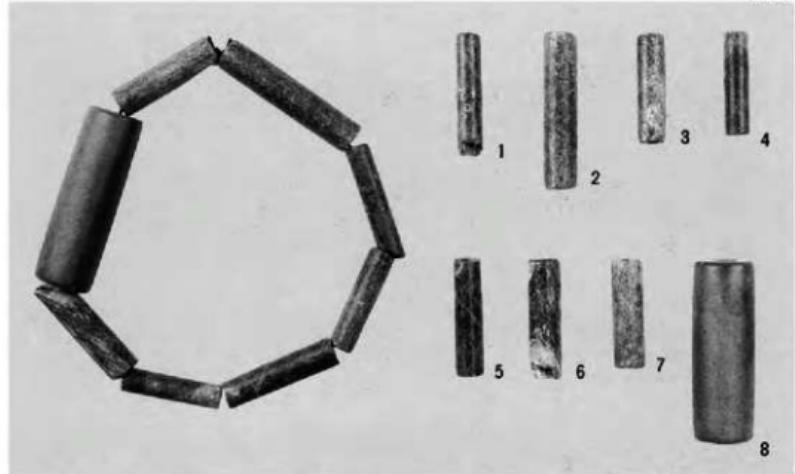
短劍



管玉

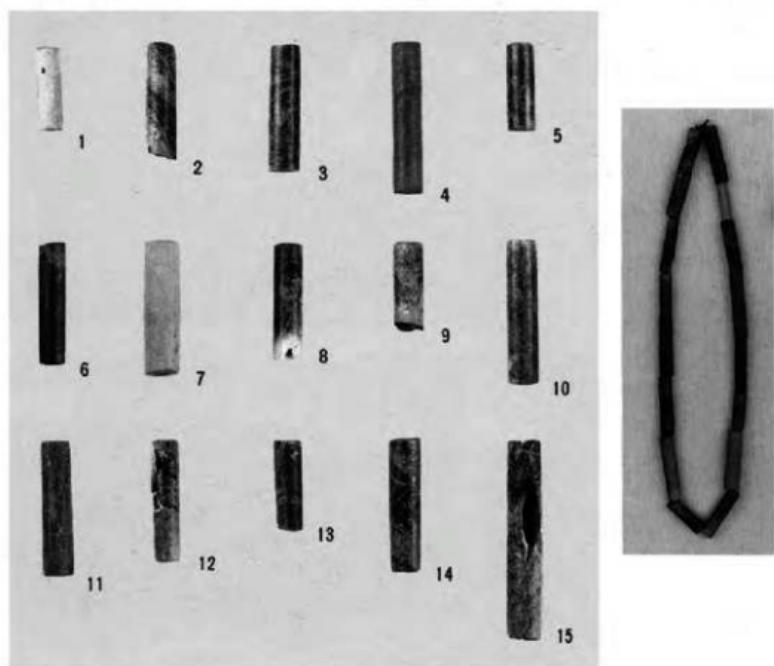


遺物X線写真



A地点出土管玉

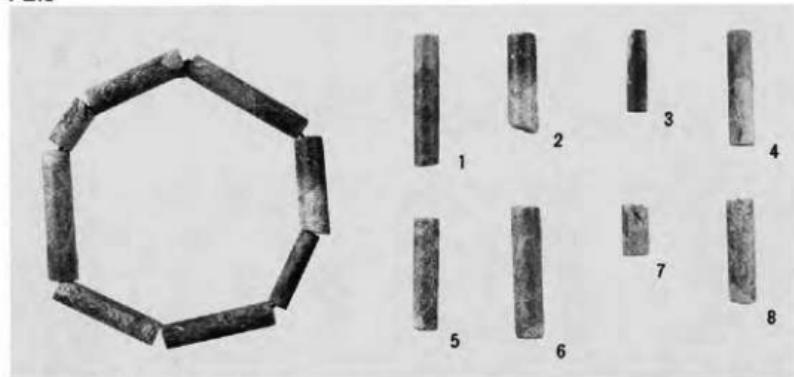
S=1/1



B地点出土管玉

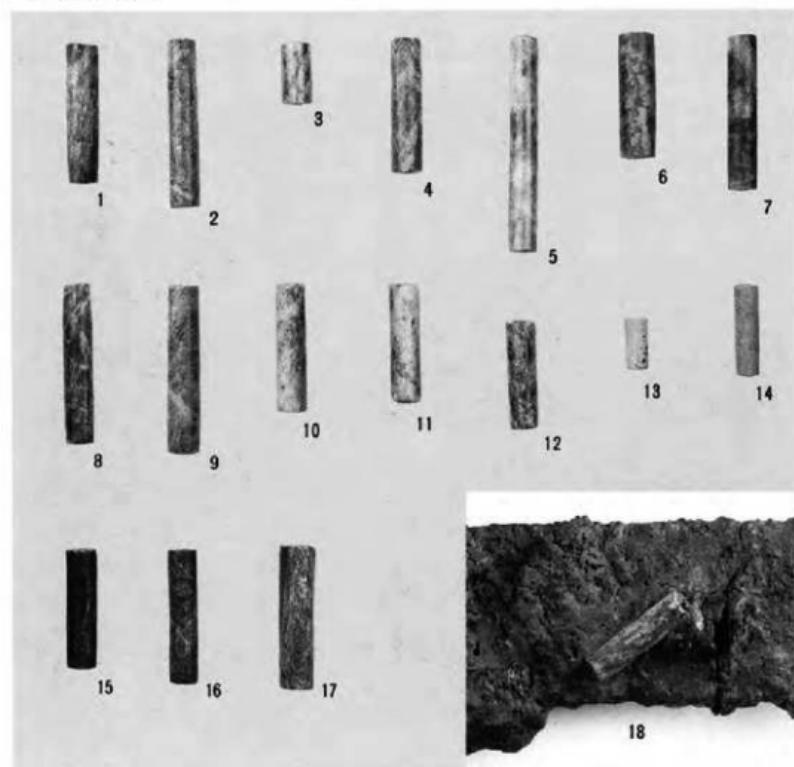
S=1/1

PL12



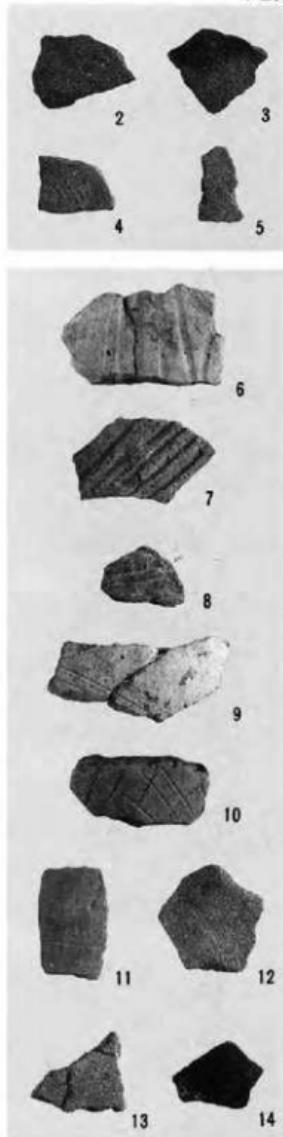
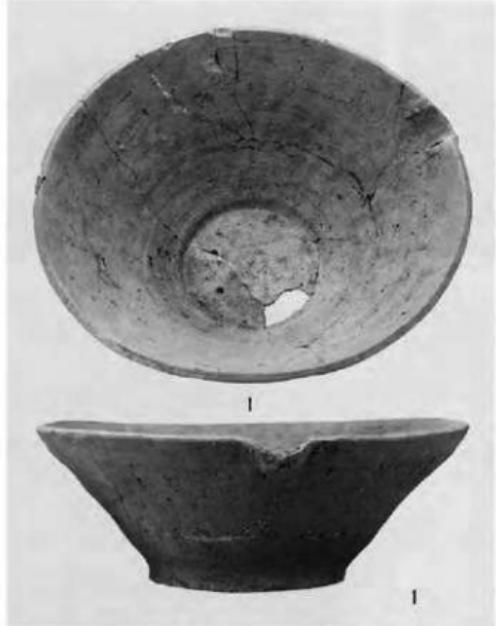
C地点出土管玉

S=1/1



D地点出土管玉

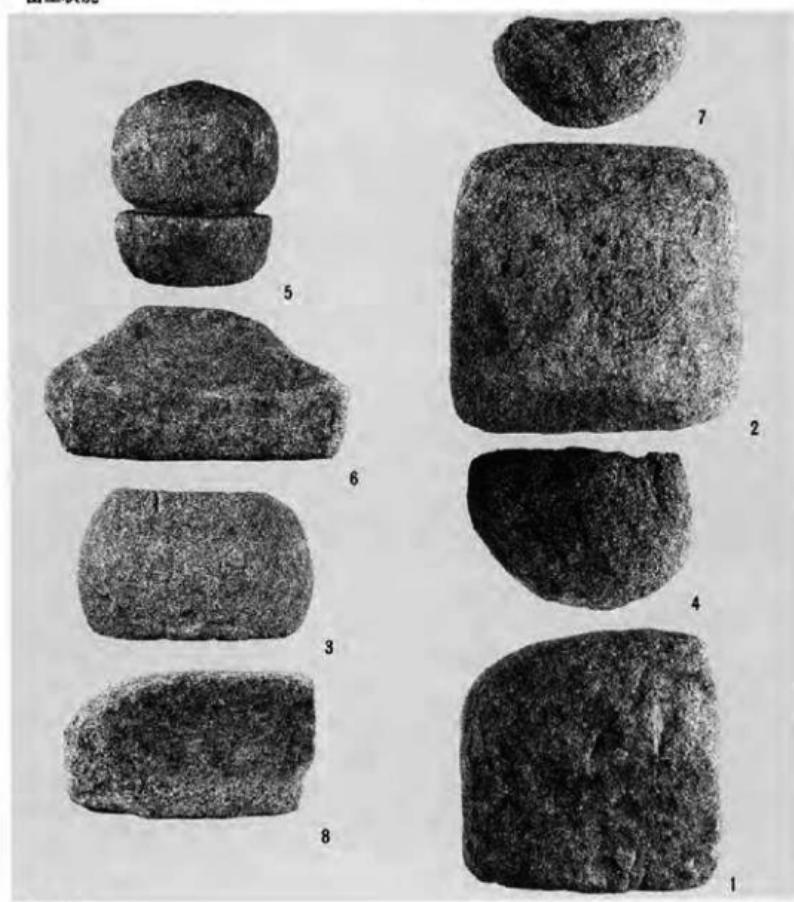
S=1/1



PL14



出土状况



五輪塔

S=1/6

茨城県教育財団文化財調査報告第61集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書20

桜山古墳

平成2年6月26日印刷

平成2年6月30日発行

発行 財團法人 茨城県教育財團
水戸市南町3丁目4番57号

印 刷 さ き ピ 印 刷 所
水戸市見川町2558-21
☎ 0292-41-2525

